

教養研究センター基盤研究講演会 no.9

「キリスト教の源流」

—イエスとパウロ—

日時：2023年10月27日(金) 16:30~18:30

場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎2階 中会議室

キリスト教の源流といえば、ユダヤ教から袂を分かって神の国運動を起こしたナザレ人イエスである。その後、パレスチナの原始キリスト教団を経て、イエスをキリストの福音として異邦のヘレニズム世界に布教したのは使徒パウロである。彼によってキリスト教の確固たる地歩が固められた。

しかし、イエスを神の子キリストと告白して布教した原始キリスト教団および後に使徒となったパウロの信仰は、はたして歴史のイエス自身の自己理解と神の国の使信の内容を正しく継承・発展させたものであるのか、という問いが、20世紀初頭から神学者の間で持ちあがり、欧米のキリスト教界一般に広く物議をかもしだした。今回、これらの問題を扱う。

講師： **朴 憲郁**
山梨英和大学学長

司会： **小菅 隼人**
慶應義塾大学理工学部教授・教養研究センター所員

2023年度 慶應義塾大学教養研究センター
主催 基盤研究講演会 no.9

キリスト教の源流 —イエスとパウロ—

キリスト教の源流といえば、ユダヤ教から袂を分かって神の国運動を起こしたナザレ人イエスである。その後、パレスチナの原始キリスト教団を経て、イエスをキリストの福音として異邦のヘレニズム世界に布教したのは使徒パウロである。彼によってキリスト教の確固たる地歩が固められた。

しかし、イエスを神の子キリストと告白して布教した原始キリスト教団および後に使徒となったパウロの信仰は、はたして歴史のイエス自身の自己理解と神の国の使信の内容を正しく継承・発展させたものであるのか、という問いが、20世紀初頭から神学者の間で持ちあがり、欧米のキリスト教界一般に広く物議をかもしだした。今回、これらの問題を扱う。

日時：2023年10月27日(金)16:30~18:30
場所：慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎中会議室
対象：研究者・学生・教職員・聴員★入場無料・予約不要★

朴 憲郁(ハクホンウク)
東京神学大学大学院修士課程修了、(韓国)長老会神学大学大学院修士課程修了、在日大韓基督教教会牧師、(ドイツ)テュービンゲン大学神学部博士課程修了(神学博士)。1984年4月から24年間、在日大韓基督教教会より日本基督教団立東京神学大学へ神学教師(国内宣教師)として派遣(実践神学/キリスト教教育教授)。その間、日本基督教団千歳船橋教会兼務主任担任教師(15年間)、2018年3月東京神学大学教授定年退職(24年間奉職)、同年4月より同大学名誉教授および特任教授。2020年4月より山梨英和学院院長、2021年4月より山梨英和大学学長。

主要日本著作
『1999の生涯と神学』、教文館、2003年、2021年1月増補改訂版刊行、監修・共同執筆、『10代と歩む洗礼・堅信への道』、日本キリスト教団出版局、2013年、『現代キリスト教教育学研究—神学と教育の間で—』日本キリスト教団出版局、2020年8月、その他多数。

お問い合わせ：towaase-ib@adst.keio.ac.jp

講師略歴

朴 憲郁 (山梨英和大学学長)

東京神学大学大学院修士課程修了。(韓国)長老会神学大学大学院修士課程修了。在日大韓基督教教会牧師。(ドイツ)テュービンゲン大学神学部博士課程修了(神学博士)。

1994年4月から24年間、在日大韓基督教教会より日本基督教団立東京神学大学へ神学教師(国内宣教師)として派遣(実践神学/キリスト教教育教授)。その間、日本基督教団千歳船橋教会兼務主任担任教師(15年間)、2018年3月東京神学大学教授定年退職(24年間奉職)、同年4月より同大学名誉教授および特任教授。

2020年4月より山梨英和学院院長、2021年4月より山梨英和大学学長。

著書

『パウロの生涯と神学』、教文館、2003年、2021年1月増補改訂版刊行。監修・共同執筆、『10代と歩む洗礼・堅信への道』、日本キリスト教団出版局、2013年、『現代キリスト教教育学研究—神学と教育の間で—』日本キリスト教団出版局、2020年8月。その他多数。

「キリスト教の源流」

—イエスとパウロ—

山梨英和大学学長 朴 憲郁

小菅 (司会) 皆様、本日はようこそご参加くださいました。慶應義塾大学教養研究センター教養研究会の第9回目です。

本日は朴憲郁 (パク ホンウク) 先生にご講演をお願いしました。少なくとも欧米、あるいはアジアにおいても、本来は、教養のベースに宗教があるのですけれども、日本の場合は宗教に対する意識が薄過ぎると私どもは考えまして、4回連続してキリスト教関係の研究者をお迎えしてご講演をお願いしております。

本日お願いいたしました朴憲郁先生は、東京神学大学の大学院を修了されて、ドイツのテュービンゲン大学でも学ばれました。1994年の4月から24年間、在日大韓基督教会より日本基督教団立東京神学大学へ神学教師として派遣されております。その間、日本基督教団千歳船橋教会の兼務主任担任教師を15年間お務めになりました。2018年3月に東京神学大学教授を定年退職され、同年4月より東京神学大学の名誉教授及び特任教授を務められております。2020年より山梨英和学院の院長、2021年4月より山梨英和大学の学長もお務めでいらっしゃいます。

本日のタイトルは「キリスト教の源流—イエスとパウロ—」です。先生からは、「キリスト教の源流といえば、ユダヤ教から袂を分かって神の国運動を起こしたナザレ人イエスである。その後、パレスチナ原始キリスト教団を経て、イエスをキリストの福音として異邦のヘレニズム世界に布教したのは使徒パウロである。彼によってキリスト教の確固たる地歩が固められた。しかし、イエスを神の子キリストと告白して布教した原始キリスト教団および後に使徒となったパウロの信仰は、はたして歴史のイエス自身の自己理解と神の国の使信の内容を正しく継承・発展させたものであるのか、という問いが、20世紀初頭から神学者の間で持ちあがり欧米のキリスト教会一般に広く物議をかもしました。今回、これらの問題を扱う」というメッセージを頂いております。

講演の後で質疑の時間を取りたいと思います。どうぞ皆さん、朴先生への問いかけをお考えになりながら、講演を聞いていただけると幸いです。

それでは、先生、よろしく願いいたします。

朴 ご紹介にあずかりました朴と申します。本日、このような貴重な講演会にお招きいただき、心から感謝申し上げます。

今ご紹介いただいたとおりですので、これ以上私のことをつぶさに紹介するまでもないだろうとは思いますが、今回こういうテーマで一緒に考えたいのは、世界の宗教の中で今日マジョリティーの宗教としてキリスト教が存在しますが、ユダヤ教からたもとを分かって2,000年続いてきました。このキリスト教がもたらした様々な文化的果実といますか、遺産といますか、それは多岐にわたると思います。文学・芸術1つ取り上げてももちろんそうですし、絵画もそうです。日本の文学者でも近代以降、キリスト教に触れない人はほとんどいないと考えてもいいだろうと思います。

そんなことで間接的に、あるいは直接キリスト教に触れる人は多いでしょう。日本は決してキリスト教国ではありませんけれども、宣教師たちが建てたいわゆるミッションスクールというものは全国津々浦々存在しておりまして、高等教育機関で学んだ学生は10%を超えているという状況で、何がしかの知識は持っていると思います。

そういう広がりを持ってこの地に立っておりますけれども、いろいろな展開において、課題や行き詰まりや問題が生じてキリスト教というのは何かを問うときに、いろいろな問い方がありますけれども、1つはキリスト教の発祥の地、あるいは創始期の源流に立ち返って見てみるというのは、1つの賢明な方法ではないかと思います。

そんなことで今回は、その根っこにありますキリスト教の、今ご紹介していただいたようなイエスとパウロをめぐる議論に集中してお話しできればと思っております。

地図を何枚かお見せしたいと思います。パウロの伝道旅行の行路 (巻末資料図2) がここに書かれております。およそエルサレムから始まって、パレスチナ地域、そして後に異邦の世界、ヘレニズムの世界に主にパウロが伝道して布教したわけです。この紫が第一次伝道旅行、緑色が第二次になります。それから、第三次伝道旅行はピンク色で表示してあります。

最後は青色で書かれているもので、マルタ島を通過して、

彼は最後に捕らえられた状態でしたが、レギオンを通過して、ローマで没したということになります。

親しみを持っていただくために、少し説明をしたいと思います。

パウロの第1回伝道旅行（巻末資料図3）です。ここに「セレウキア」とあります。今はシリアの一角にありますけれども、セレウキアから出発して、こういう行路で第1回の伝道旅行をしました。

彼の福音伝道の行路について、聖書の中で丁寧に描いているのは使徒言行録という文章でありまして、ルカという人が記述したものです。第1回がこのピンク色のところです。セレウキアからこういう行路を歩いていき、デルベまで行きました。

実は私は、第1回から第3回までのパウロの伝道旅行をたどる企画をした旅行会社の誘いを受けて、私が引率することになりました。ほぼ3回こういうところを回りました。今ここは小アジアのトルコですけれども、その中の一畝田舎のデルベというところまで訪ねました。

3回にわたるパウロの宣教旅行はどういう仕方になされたかということ、ほぼ海路と陸路です。陸路の場合は馬に乗りませんで、ほとんど徒歩です。ですから、日本でいうと北海道から九州まで何往復したか分からない、そういう距離ですし、シリアの地中海側に面しておりますセレウキアから比較的小さい船に乗って行くわけです。要するに、古代人は大体そうだったと思うのですけれども、強靱な体を持っていた訳です。

それから2回目の伝道旅行（巻末資料図4）は、エルサレム、ダマスカスを経てアンティオキア、リストラです。

このアンティオキアというのは、シリアのアンティオキアと小アジアのアンティオキアなど、アンティオキアという名前は何か所かあるのですけれども、シリアのアンティオキアが多く言及されますが、小アジアのアンティオキアもあります。

こういう行路でトロアスから海を渡って、ギリシャ半島の北部から南端に行き、アテネを経てコリント、そして港があるケンクレアイに行き、そこから戻ってくるというのが、第2回の伝道旅行でした。

3回目（巻末資料図5）はアンティオキアから出発するということになります。そしてここから黄色の線をたどってトロアス。今日ですと、ここは数時間あれば船で行ける距離になります。それからアソス、ミレトス、サモス、そしてロードス島でこちらに来るといって行路をたどっています。

最後は捕縛されて、エルサレムからカイサリアに移送さ

れて3年幽閉されます。パウロはローマの市民権を持っていましたから、ローマで公正な裁きを受けたいと申し出たので、捕縛された状態でローマに向かいます。

私はこの跡をたどって、10人ぐらいで旅行をしました。マルタ島というのは要塞のあるところで、十字軍の拠点だったところです。とてもすばらしい島です。そこからシチリア島に朝行き、その後イタリア南端のレギオンというところからバスで、ほとんど1日かかってローマにたどり着きました。そんな行路です。

お渡ししました原稿に従って進めていきたいと思いません。最初の「はじめに」というところの2つ目の段落から読み上げていきます。

使徒パウロの手紙の中に展開されている神学全体の中心に、信仰の対象としてのイエス・キリストが位置を占めております。パウロは当時、ユダヤの地から遠く離れた異邦の地であるガラテヤ、テサロニケ、フィリピ、コリントなどの人々に福音を宣べ伝えて設立しました。いわゆるヘレニズムの諸教会の信徒に向けて、ナザレのイエスの生涯、とりわけその終わりに起こった十字架の死と復活の出来事が、全世界の民に対する神の決定的な救いの実現なのだということ、教会の具体的かつ実践的な諸問題の取扱いの中で、牧会者、伝道者、神学者として説きました。新約聖書27巻の中の著者の数からして、大体17巻が、パウロあるいはパウロの名によって書かれています。また、イエス・キリストの福音の神学的な思索と理解を深めた点においても、まず筆頭にパウロの名を挙げるができます。その神学が、使徒と使徒後の時代の教会形成にとって重要かつ不可欠な基礎だったことは確かです。

地上を生きたナザレ人イエスのことを新約神学では「歴史的イエス」、もう少し縮めて「史的イエス」という言い方をしますが、「史的イエス」を神の子キリストと告白し、布教し、宣伝するわけです。神の子キリストだと告白する。この布教されているキリストのことを「ケリュグマのキリスト」と言います。「ケリュグマ」というのは宣教されたキリスト、宣べ伝えられたキリスト、宣伝されているキリストです。告白して布教した初期キリスト教、すなわち原始キリスト教団及び後に回心して使徒となったパウロの信仰が、彼の神学の中心にあるのは確かです。これは第一コリント15章の3節～11節までに要約されておりまして、そこに聖書箇所を引用しておきました。ここでは読み上げませんが、時間があれば目を通していただければと思います。

本論に入りまして、「新約聖書に証言されたイエス・キ

リストを巡る論争」です。今申した史的イエスとケリュグマのキリストとの関係です。

ケリュグマのキリスト理解が、果たして歴史のイエス自身の自己理解と、彼が起こした神の国運動における使信、メッセージの内容と広がりやを正しく継承・発展させたものであるのか、という問いが、20世紀初頭から神学者の間で持ち上がり、ドイツ及び英米のキリスト教界一般にまで広く物議を醸し出したのです。

次の2ですけれども、両者の関係をめぐる論争的研究についてです。

ウィリアム・ヴレーデ (William Wrede) という新約聖書学者がいます。この人は、キリスト教の創始者が「イエスカパウロか」という二者択一的な問いを立てながら、結局パウロを、キリスト教を贖罪宗教化し、罪の赦しを説く、宗教にした、いわば「キリスト教の第二の創始者」とみなしました。1904年に書いて、2版が1907年です。“Paulus”という書物です。これは私も持っていますけれども、そういうふうに述べました。

これは当時、自由主義神学者の間で支配的であった見解、すなわち、神学者パウロがイエスの単純・素朴な宗教を腐敗させた、という基本的な見解と呼応するものとなったのです。

ですから、イエスからその後、イエスの生涯を終えた後、原始キリスト教会とパウロを通してキリスト教が発展したが、それ自体が逸脱であり、頹落の歴史だという批判さえする人がいるわけですが、源流から大幅にそれといったのだということを言うわけです。

同様にヴェルハウゼン (Julius Wellhausen) という人は、「イエスは最後のユダヤ教徒であり、パウロは最初のキリスト教徒である」と主張いたしました。イエス自身が、自分の名によってキリスト教を発展させるということは考えてもいなかったのだと。イエスの生涯の終わりの後に、弟子たちを中心にそのように広められたのだというわけです。

この考えはそのまま、20世紀中に最も貢献したブルトマン (R. Bultmann) に引き継がれます。ブルトマンは実存論の神学者で、哲学者でいうとハイデガーの影響を強く受けた人でした。

ブルトマンは、イエスは後期ユダヤ教に属したが、キリストは原始キリスト教会によって初めて知られ、告知されるようになったのだとの結論に至りました。弟子たちによってメシアとして宣べ伝えられ、よみがえりの主を称える信仰者の輪が形成されていった、と言います。

こうして、ガリラヤ帯とエルサレムとの間で神の国運動を繰り広げたイエスという人物と、後に救い主 (メシア) としてヘレニズム世界にまで宣教されたキリストとの間の連続・非連続の問題が、いわゆる「史的イエスとケリュグマのキリスト」という問題として論争され、研究されていきました。そこで「パウロではなく、イエスに帰れ」という合言葉となり、また、パウロ批判によって、キリスト教信仰全体の合法性・非合法性の問題が絶えず新たに提起されました。

機会あるごとに、20世紀の代表的な学者たちの間でも、あるいはキリスト教文学者の間でも、「イエスに帰れ」という言葉が盛んに言われたのでありました。そういう問題意識からです。

しかし他方では、こういった動向の中で、新たな探究によって、今言及した両者間の亀裂は大幅に縮められてきました。つまり、教会のキリスト信仰がイースター、復活の出来事に対する応答であるにとどまらず、実は (地上を生きた) イエスの説教に対する正しい応答でもある、とみなす傾向が認知されてくるようになりました。地上を生きたイエスの中に、既に初代のキリスト教へと発展していく基本的な自意識と思考、神の国運動というものがあつた。

例えば、ユダヤ教の枠の中にいましたけれども、イエスはそれとことごとく対決しました。パレスチナにいてもそれを乗り越えて異邦人にまで福音が及ぶというところがあるわけです。ですから、教会のキリスト信仰というのは、実は地上を生きたイエスの説教、神の国説教に対する正しい応答でもある、とみなす傾向が認知されてきたのです。

それは、イエスと原始キリスト教団及びパウロとの断絶ではなく、連続性の可能性を指し示すものとなります。ブルトマン学派の人でハイデルベルク大学の教授であったボルンカムは『パウロ』という本を書いていますけれども、彼はそのことに同意しながら次のように述べました。「イエスとパウロの使信は、内容と考え方と言語の点で相違があるにもかかわらず、両者とも、人間とその世界とを目標としている点で、すなわち、神の前における人間と世界、そして世界に対する神の態度 (赦しの愛と自由) を目標としている点で、一致している」と。聖書箇所などもそこに挙げております。ボルンカムはそのように述べております。

このように少しよりを戻して、史的イエスとの関係性は単に非連続ではなくて、連続性もあるのだということを言及する研究者が現れたということです。

さて、3番目ですけれども、「イエスは実在したか」というイエスの歴史性の問題が出てきます。

上に述べた問題提起よりもはるかに過激な、ラディカルな問いが出ていました。すなわち「イエスは果たして実在したのか」という問いが、以前から持ち上がっていました。ドイツの代表的な新約学者の一人で、現在はハイデルベルク大学の名誉教授であるゲルト・タイセンという人が、2010年10月に日本新約学会の招待で「イエスとパウロ」と題する講演を行いました。その記念講演を基本とする日本語の書物『イエスとパウロ』という書物が発行されました。

私がテュービンゲン大学に留学したときに、タイセンはハイデルベルグからやってきて、講演など一、二度していただいたのを私は聞いております。まだ50代後半だったと思いますけれども、非常にシャープな人です。彼はその頃から、キリスト教神学と、それに隣接学問としての心理学、それから社会学とも学際的な関わりを研究して一躍有名にもなって、日本語でも幾つか訳されておりますが、そういう貢献をした人です。

日本に来て講演したものを中心にまとめたものが、『イエスとパウロ』という書物です。何とその第一章が「イエスは実在したか」という問題を扱っているのです。その中で興味深いエピソードを紹介しております。権力の頂点にあったナポレオンが1808年、ワイマールでの宮廷舞踏会において、ドイツの詩人ヴィーラントに出会いました。そのとき、ナポレオンは、イエスはもしかしたら全く存在しなかったかもしれない、という意見を披歴したのです。このテーゼは、当時のフランスの著述家たちが詳しい資料分析もないまま主張されたものでした。

ヴィーラントは即座に答えました。「まあ、これから一千年もしたら、そんなふうには、『ナポレオンは実在しなかったし、イエスの戦いも存在しなかった』と主張されるかもしれませんね」。そんなふうにしたわけですね。すると皇帝は、にやっと笑って「大変結構な答えだ！」と言って、微笑みながら話を続けたということでもあります。

しかしこの問題は、ヴィーラントのジョークによって見過ごすわけにはいかない議論を研究者間に引き起こし続けたのでした。例えば、ヘーゲルの弟子のブルーノ・バウアー (Bruno Bauer) という人、それからアルベルト・カルトウホフ (Albert Karthoff) という人は、研究に基づいてイエスの実在性を疑う主張をしたのです。

しかし、タイセンが紹介しながら確認しているように、イエスの生涯を描いた、マタイ、マルコ、ルカが中心ですけれども、福音書や、パウロ書簡をつぶさに検証すると、イエスの実在を疑う余地はほとんどないだろうということ

です。これは後でも私は少し触れます。

4番目ですけれども、「パウロにとってのイエスという視点」です。

以上において、「イエスとパウロ」をめぐる問題状況をだまかに描いてみましたけれども、私がここで「史的イエスとケリユグマのキリスト」という一大テーマについて全面から論じることは、今回の趣旨ではありません。むしろ、パウロ書簡の中で、パウロは地上のイエスをどう把握していたのか、そしてそれはイエスの歴史的現実に対する適切な解釈であったのか、という問題を扱ってみようと思うのです。

パウロの伝記的記述ということ。まずはガラテヤの信徒への手紙1章が挙げられます。パウロの文書はすべて、教会へ宛てた手紙の形を取っています。いろいろ問題があったときにアドバイスするという形の手紙を送っています。その中の1つが、ガラテヤの信徒への手紙です。その1章の13節~20節は、とても大切なところなので、引用文を読ませていただきます。

「あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの人よりもユダヤ教に徹しようとしていました。しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださいました神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。それから三年後、ケファと知り合いになろうとしてエルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在しましたが、ほかの使徒にはだれにも会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました。わたしがこのように書いていることは、神の御前で断言しますが、うそをついているものではありません」と言いました。

この地図で見ると「ダマスコ」は、今のシリアのダマスカスです。私たち旅行団はパウロの伝道の旅をたどりましても、シリアは現在内紛がしょっちゅうあって、パウロが回心して身を寄せた町ダマスカスに行きたかったのですが、結局ここだけは行けなかったのです。私は生涯を終える前に一度はダマスカスに行ってみたくと思っています。

今お読みしましたところで、サウロ (パウロ) は、エ

エルサレムからダマスコにキリスト教徒を迫害するために行く途上で、幻のキリストに会って回心したと回想しています。

付け加えて申しますと、使徒パウロは教会に宛てた手紙を書いていますが、自分の伝記的なことはほとんど言いません。自分が過去どういうことをしたかということは、ほとんど言わないのです。ただ、論争的な場面で有効だと思うときには、自分の過去がこうであったということを使うわけですね。まさにこの箇所もそうです。そして、必要性があってやむを得ず自分の過去について述べたこの箇所が、とても重要な箇所になってくるのです。

その箇所の終わりの「ケファと知り合いになろうと」の「ケファ」というのはペトロのことです。「ケファー」というのはヘブライ語です。ペトロというのは、ギリシャ語の「ペトロス」、もともと「岩」という意味です。その意味をギリシャ語に訳したら、「ペトロス」、ペトロとなるわけです。もともと「ケファー」です。

それからその次の、終わりから2行目の「主の兄弟ヤコブにだけ」、つまりもう一人だけ会ったと言います。「主」と言ったのは主イエスのことです。イエスを主、メシアと信じていたときでしたから、主イエスの兄弟であったヤコブというのは、イエスの弟です。新約聖書の誕生、クリスマス物語では、イエスは聖霊によって宿ったと述べています。マリアとヨセフの間に血肉関係で生まれたわけではなく、聖霊によるとあります。しかしその後、マリアとヨセフの間に子どもは何人も生まれて、福音書には姉妹たちも出てくるわけです。そのうちのヤコブという人がイエスの弟で、そして後に原始教団のキリスト教徒になるわけです。立場からいうと伝統派です。そして、ユダヤ教のよい戒めは守るべきだという考えです。保守伝統派という立場ですね。このことも後で少し触れようと思います。

次に、「キリスト教徒迫害とダマスコ途上における回心」です。

ファリサイ派のユダヤ教徒であったサウル、パウロの元の名がサウルでして、これもヘブライ語の言い方では「シャウル」ですね。サウロのキリスト教徒迫害の理由は何であったのか。律法への熱心さによって、パウロがステファノを含むヘレニスト（ギリシャ語を話す散在のユダヤ人キリスト者）たちに怒りを抱いた核心的な原因は、律法や神殿に対する彼らの自由な振る舞いそのものよりも、やはりイエスという人物をめぐる事柄であったということです。

今述べた中で、ステファノを含むヘレニストというのは何かと申しますと、故国を離れて離散して周囲のヘレニズ

ム世界に住むユダヤ教徒たちのことで、やがてキリスト教徒になる人々がいます。彼らはバイリンガルです。ヘブライ語も家庭で話せますけれども、ギリシャ語も堪能です。パウロもまさにそういう人で、イエスとは違うわけです。

ヘレニストは、ギリシャ語を話す離散のユダヤ教徒たちで、機会あるたびに故国に帰ってくる。その間にキリスト教徒になる人々がありました。ただ、思想的・文化的にはヘレニズムの世界への空気を知っていますから、かなりリベラルな立場です。故国にやってくる、どちらかといえば神殿とかユダヤ教の規定に対しては、リベラルで批判的な立場を取るわけですね。結局迫害に遭って、ユダヤ教徒から追われる羽目に陥ることになります。

実は、パウロもまだ回心する前は、ヘレニストたちの自由奔放な振る舞いには我慢ならなくて、迫害しようとしていました。しかし、根本的な迫害の理由は、彼らの振る舞いよりも、その根本にあるイエスという人物をめぐる深い疑問を持っていました。

かなり小グループであったヘレニストたちは、ユダヤ教徒から種々の処罰を受け、打撃をこうむって、エルサレムから隣接する領地や町々に逃れていきました。ここでいうと、エルサレムにいるユダヤ教徒から迫害されて、一方はダマスカスから内陸のほうに逃げます。しかし、もう一方は海岸沿いに逃れていく。これはあまり変わらないようですけれども、そういうふうには離散していったのです。

しかし、サウロ／シャウル（パウロ）は、エルサレムのシナゴグからダマスコに派遣されて、そこに逃れた扇動者たちを縛り上げようとしていました。ところがその目標に達する直前に彼は、十字架の上に死んで復活した人のあの幻に遭遇し、それによって彼の古い生き方は打ち砕かれ、全く新しい、予期しない将来が彼に開かれたのです。

これは、ルカが記述する使徒言行録9章1節以下、それからさらに2か所、合わせて3回にわたって、パウロがドラマティックな回心をしたということを語っています。

これについては絵画に表した人がいます。もちろん想像図ですけれども、有名なイタリアのカラヴァッジョが描いたものです。馬に乗ってダマスコに向かう途上で、幻のキリストに出会って倒れてしまう場面（巻末資料図6）を描いています。

実にパウロ神学は、この出会いに基づく従来の価値と目的の根本的転換に依拠しております。すなわち、このユダヤ教の教師は諸民族伝道者に転換します。そして「律法のための熱心さ」に代わって、律法からむしろ自由な福音の告知が場を占め、「トーラー（律法）の業」による義認、

とか、トーラーを守ることによって神の前に義とされ、永遠の命を得るという考えに代わって、信仰による神なき者の義認が場を占め、業による自由意志に代わって、ただ恩寵により賜った信仰が場を占めるようになります。さらに十字架上で呪われた似非メシアへの憎悪から、イエス認識の転換によって「十字架の神学」は生起します。それは十字架におけるメシアの代理的・犠牲的な呪いの死によって、人類の救済を基礎づけるものとなりました。

使徒言行録の著者ルカほど物語風には語っていないのですけれども、使徒パウロは先ほど申しましたように、論争的な場面においてだけ自分の過去をほんの少し言及する。それが先ほど読んだガラテヤ書の箇所として、ダマスコのことも言及しているわけですね。

その次は、「エルサレムのペテロ訪問の成果」です。

先ほどお読みしたガラテヤの箇所の終わりに、回心した後すぐにエルサレムに行かないで、アラビアに退きます。そして3年たって初めて、エルサレムに行くこととなります。ケファ、つまりペトロ訪問の成果ですけれども、パウロはペトロから、地上を生きたイエスに関する豊富な情報とイエス理解を知ったのです。

2つ目、そしてペトロはパウロから、彼のダマスコ回心の意味とイエス認識の転換について知ったのです。

わずかに2週間エルサレムに上って、十二使徒を代表する原始キリスト教会の筆頭に挙げられるケファ、すなわちペトロに会ったわけです。

幻のキリストに出会ったのとは違って、地上を30年少々生きたイエスがどういう人であったか、何を語ったか、そしてそれをイエスの弟子たちはどう理解したかということ、2週間の間とどまりながら、初めてケファから聞いたのです。

例えば、「イエスはどんな人でしたか」と聞くわけですね。それから、イエスの弟もいるわけですね。幼少期のことをもしかしたら聞いたかもしれないですね。「どんなでしたか」と。これは非常に劇的な対話です。2週間という、相当長い期間の会話ですね。

こういう箇所はあまり皆さん目につけないのですけれども、これはいろいろな意味で後のキリスト教、初代の発展において意味あるものですね。

補足説明をいたします。パウロは回心の直後ダマスコで、次に一定期間アラビアで、そして再度ダマスコで、合わせて2、3年の伝道経験を積んだ後、聖都エルサレムに上京しました。先ほど読んだガラテヤ書1章の18～20に書かれているとおりです。

それは、この一匹狼的な伝道者が、聖都にある若いイエス共同体の代表者とのつながりを持つと願ったからです。しかし彼は、それがケファ、つまりペトロと主の兄弟ヤコブへの限定的な訪問であった、と神に誓って弁明したのです。なぜ神に誓ってそんな弁明をしながら、なお会おうと思ったのかということですが、恐らくガラテヤのユダヤ主義的キリスト教徒たちの言い広めたうわさ、すなわちパウロがその初訪問以来、多くの指導者、指導的な使徒たちへの従属的、依存的な関係に入った、という見解を退けるためです。

私の引用箇所には載っていないので、その後で振り返って彼はこういうことを言っています。「キリストに結ばれているユダヤの諸教会の人々とは、顔見知りではありませんでした。ただ彼らは、『かつて我々を迫害した者が、あの当時滅ぼそうとしていた信仰を、今は福音として告げ知らせている』と聞いて、わたしのことで神をほめたたえておりました」(22～24節)と述べます。

すなわち、パウロに劇的に起こったことは非常に不思議な出来事あったとうわさが広まったことを、パウロは知っているということです。私が引用した少し後の箇所で、そう述べています。

その補足説明のところをもう少し進めていきます。ルカはパウロの言葉少ないこの訪問を補うかのように、しかし明らかに使徒パウロの言表と矛盾する仕方で、詳細に物語ります。つまりルカは、イエスの回心の出来事をドラマティックに物語風に書きますけれども、彼の描写している仕方と、パウロが自分の過去を語っていること、少しずれるのです。ある意味ではルカが脚色している可能性もあるわけです。そういう違いがあるのですけれども、内容的にはパウロとの驚くべき次の一致点も示している。

1. パウロはダマスコからエルサレムに来る。
2. ダマスコでの命の危険から逃れてである。
3. したがって、間接的に明らかのように、使徒はエルサレム訪問をある目的のために(例えば、彼の職務の合法性に不可欠な十二使徒とのつながりを求めて)急いでいたわけでない。つまり、自分が遅まきながらイエスの弟子になったということを認めてもらうために、エルサレムの人たちに会いにいったわけではないということを盛んに言い、どこまでもキリストの啓示によってだと言うのです。

それから、4. ただし彼は、自ら進んでこの訪問を決めた。誰かに勧められてではなくて、自分から進んで行ったということ、を言っている。あるいは、ケファに招待されたとも言っていない。この辺りの行き方、どう行って、しか

も限定的な人しか会わなかったのかという辺りを新約学の研究する人は細かくやってみせるわけですね。そういうところはおもしろいと思います。

ガラテヤ書1章の22～23節に基づいて、かつての迫害者の生の転換のことがエルサレムで既に知られていたとするならば、パウロはそこで彼の当時の友人や共同迫害者から復讐を受けることを恐れていたに違いない、と推測されます。つまり十分あり得る憶測を述べるならば、彼は自分の命がエルサレムにおいても極めて危ぶまれたので、到着に際して、できるだけそこで知られないままでいようとしたというのは、確かだろうと思います。

つまり同じユダヤ教徒の仲間がキリスト教徒を迫害に行く、その先頭に立っていたわけです。それが転向してしまったということで、あるいは裏切者だということで、仲間から命を狙われる。だからエルサレムに行くとしても、そっとうまく行くわけです。そういうことが背後にある。

そこに書いてある使徒言行録23章の16～22節によれば、パウロの甥が彼をかくまっていたとあります。そして恐らく彼は、何ら事を荒立てることなく、この密かな訪問を果たし終えたと思われる。それが、「ケファ及びヤコブにだけ会った」背景事情だろうと思います。その事情のゆえに彼はまた、十二人以上いたに違いない他の全ての使徒たちに表立って会わなかったし、彼らもまたパウロを見なかった。あるいは彼らはまだ、当時の迫害者から福音の告知者に転向したという彼を見たいとは願わなかったかもしれぬ、ということです。

パウロが面識を求めるケファと並んで、主の兄弟ヤコブ（イエスの弟ですけれども、イエスの死後に信徒の群れに加わりましたが）のもとにやって来るというのは、最高指導者のケファに加えて、もう1人の律法厳格派の指導的人物が求められたことと関係するかもしれません。最高指導者のケファ、すなわちペトロはどちらかといえば穏健派、中道派の立場です。律法についても食物規定についてもある程度守りますけれども、そんなに厳格ではない立場でした。それに対して、主の兄弟ヤコブは厳格派だった。

その関連で付言するならば、パウロのエルサレム訪問の7年後の43年、ヘロデ大王の孫としてユダヤ全土をついに領有したアグリッパ一世は、ゼベダイの子ヤコブを殺し、ユダヤ人の歓心を買うなどして、律法に忠実な彼らの意向を酌みながら平穏な政治を行いました。使徒言行録12章3節に出てきます。その迫害によるペトロの逃亡の後、主の兄弟ヤコブは、エルサレムでの指導権を握り、それゆえに49年頃の「使徒会議」のときには、彼が柱とな

る人々の中で第一人者に立ちます。そして、ケファのほうには第二の地位を割り当てられるのです。

このことは、私たち読者にとって何の違もないように思われますが、筆頭に誰が立つかということはイニシアチブを誰が取るかという一大事です。ヤコブの名前が先に出ることは、イニシアチブのチェンジです。その背景理由として、この時代は、律法重視の風潮に見合う慎重さがユダヤ人キリスト者に必要とされる厳しい状況にあり、それが律法に一層厳格なヤコブの指導的登場に現れているのです。

当時は圧倒的にヘブライ人、つまりアラム語を話すユダヤ人キリスト者が集まっていました。そんな中で、かつての律法熱心な迫害者が今やヘレニスト以上のトーラー批判者としてエルサレムに出現するということは、パウロだけでなくユダヤ人キリスト者たちにとっても危険なことと感じられていたのです。

周りはユダヤ教徒たちが目を光らせている。だから、ユダヤ人クリスチャン、キリスト者にはなつたけれども、あまり過激なことを言わないでおきたいという、そういう気持ちで働いた。そういう中で厳格派のヤコブが筆頭に立ったというのは、そういう意味があるだろうと思われます。

パウロはケファ、つまりペテロの下で15日間客として滞在しました。食事の交わりも当然含む「客のもてなし」というのは、原始キリスト教の1つの大切な徳（virtue）であり、また相異なるイエス共同体の結束とその路傍伝道の実りある働きにとっても、基本的諸前提の1つを形づくりました。それは既に、旅人の接待に関するパウロの勧告とパウロ伝承の中に出てきます（ローマ書12：13、その他）。また、イエス伝承とルカの伝道物語（9：4～5、その他）にも見られるものです。多様に証言されたこの客接待の事実は、それだけでも既に、互いにいがみ合い分裂した諸集団という考えとは相入れないのです。

これは何を言っているかと申しますと、出発点となる原始キリスト教の立ったときから、ペトロやヤコブのグループとパウロの築いた教会とは、一致しなかった、いや分裂気味にあったという研究などありますけれども、決してそうではなかったであろう根拠となります。

初期の諸教会の「カリスマ的、創造的な多様性」は、まだ修復不能な対立を生み出さなかったに違いないと思います。だがそれにしても、ケファが面識のない、しかも種々の点で問題のあった客人を2週間も自分の下に宿泊させたということは、決して自明なことではなかったでしょう。ケファのこの自発的なもてなしは、突如エルサレムに現れたこの特別な訪問客への個人的な関心ともきつと結びついて

いたに違いありません。パウロのほうはもっと明白に、個人的関心を抱いていた。そうでなければ、エルサレムには来なかったと思うのです。

この引きこもった2週間というのは、双方の豊かな交換を提供しました。確かに、パウロはエルサレムの3年不在、つまりアラビアとダマスコで過ごしました。当時アラビアはナバティア王国があったところで、それなりに文化的に発展しました。パウロは回心後3年も、勢いよくそこで伝道活動をしたけれども、何の言及もないというのは、多分あまり伝道の成果はなかったのだらうと思われる。

それはともかくとしまして、そのエルサレムでの3年不在とわずか2週間ケファの下で滞在したというこの対照によって、彼の使徒職の完全な独立を強調する意味があります。つまりエルサレムのイエスの弟子たちを中心とするその権威ある人たちに依存して自分は使徒となったのではないと主張する意図があります。むしろイエス・キリストの直接の召し、コーリングによって、使徒となったのだということです。権威の根拠はそこにあるということを感じて言いたいわけです。しかしペトロに会おうとはしたわけでは、そんなところでは、

そのことは、この重要な15日間に両人がよく知り合い、相手から学び合ったことを排除するものではないでしょう。むしろ、双方互いに何らかの知識を持っていたに違いないのですけれども、この2週間という期間は、相手方への偏見を取り除いてかなりの信頼の素地を築くのに適していました。

この訪問で問題なのは、オリエントでは半日あれば足りる「表敬訪問」だけではなく、原始キリスト教の進展に本質的なものとなった実質的の出会いであります。コンツェルマンという新約学者がいましたけれども、彼によれば、彼の言うこの「短い訪問」というのは、「その対話の内容を抜かしている。なぜなら、この訪問がどうも彼自身の神学にとって実質的でなかったからである」と『原始キリスト教史』という書物(邦訳書あり)の中で言っています。

しかしこの見解は、ガラテヤ1章15～24節の報告の意味を全く誤解していると思われる。というのも、使徒はどこにおいても伝記的詳細を究めるレポーターなどではないからです。またこの15日間の交わりがなければ、その13年後の「使徒会議」で、いろいろな食物規定問題があったわけですが、その会議での出会いはそれほど積極的な経過をたどらなかつたのだらうと思われる。

殊に「柱と目される人びと」のうちでも重要なヤコブが律法厳格派を代表して、この風変わりな客に会いたい、判

断を下したいと思ったことは、とても意味があることだと思います。その際に恐らくヤコブは、原始キリスト教団の中でも大切に重んじられた「二人、三人の証言によって事は立証される」という原則がありますけれども、それに従って、ケファを補充する「証人」の役割を果たしたのだらうと思われま。

さらに、ケファが後にこの特異な訪問をエルサレム教会に報告したことは、ほぼ間違いのないと思います。パウロに会ってきたということ、当然報告はしているはずで。

この「面識」の内容について、人は積義的「長編小説」のようにあれこれと考えあぐねるべきではないかもしれないと、クラウス・ベルガーという人が『神学史』の中でそう言っています。しかし、少なくともパウロにとってそれは、単に「ケファからの情報、およびイエスの教えと働きに関する情報、伝承を得ること」、これはキルパトリックとかダンなどが言っていることではあるのですけれども、そういうことに集中したのでなく、それ以上のものであった。もちろん情報と結びつかない「個人的面識」などはあり得ませんけれども、パウロに気がかりなのは、ケファの個人的データと性格以上に、むしろ彼の神学思考、つまりキリストをどう理解しているのか、救いとは何なのか、その理解であります。そして宣教内容、確かにイエスの言動も含めて、そのことに関心があった、と推察されます。

言い換えるならば、あの過越の(十字架の)死から約6年たったこの時点で、対話の中心に立ったのは「イエス」、すなわち地上を生きて十字架につけられ、復活して高擧し、今や告知された来るべき主であります。実に両人の生と思考の中心点にあったものは、イエスの人格と彼によってもたらされた救済であります。そして、パウロを2週間も自分の下にとどませたペトロ側の強い関心は、復活者イエスによる自己の召命と伝道を語るパウロその人であり、また以前のファリサイ的律法学者が語り出す預言的約束とトーラーの新たな理解及び福音理解にあったと思われま。

2週間話していても、今述べたような核心的な部分の全てが話題に上らなかつたとしたら、この2人はいち早くから互いに不一致・分離の道を歩んでいたに違いないと思われま。単に天気のことなど表面的な会話で2週間を過ごしたとすれば、終末時の緊迫したときは余りにも惜まれるのです。否、確かにこの客人接待の期間は、互いに取りつかれるほどの集中的な相互交換というものを指示しております。

さらに、積義家は一般に、この2週間にパウロがどのよ

うな諸伝承を受けたのかを専ら問題にします。諸伝承というのは、イエスから聞き知ったことを口頭で伝えることですね。

しかし、その逆の問い、つまりエルサレムの律法学者として教養を積んだ彼が、同時に「ヘレニズム的」ユダヤ教をも知り、やがて最も成果を上げる伝道者・教会設立者となった者として、あのガリラヤの漁師、つまりケファに影響を与えなかったかどうか、という問いはほとんど立てないのです。

しかし、ガラテヤ書2章の15～16節でパウロは、血統からして異邦人でなく同じユダヤ人であっても、人は律法の実行によってではなく、キリストへの信仰によって義とされることを「知って」、そのユダヤ的基盤を破棄するゆえに、彼はアンティオキアで優柔不断なケファを叱責するのです。これはガラテヤ2章の14節に出てきますけれども、ケファはアンティオキア、先ほど地図に出てきましたけれども、そこでは、ユダヤ教徒にとって異邦人と食事するなんてことはあり得なかったわけですが、アンティオキアで初めてキリスト教会の群れができて、キリストを受け入れたユダヤ人と異邦人でキリストを受け入れた人たちが一緒に礼拝を守って、その後食事をしたわけです。

ケファもそのうわさを聞いていたので、アンティオキアに出かけました。ユダヤ教徒にとって食物規定というのはきわめて重要で、ある食物は禁じていました。だがケファはそういうことに気兼ねせず、一緒にユダヤ教徒、異邦人キリスト者と食事をしました。

しかしそこに、この後の箇所を読まれると分かりますけれども、エルサレムからヤコブ派の者が監視に来たのです。ヤコブ派というのは厳格派です。筆頭に立ったケファ、つまりペトロがどういう振る舞いをしているか、どういう食事の仕方をしているかを、監視しに来たわけです。そして、ヤコブ派から来た人たちと出会ったときに、ケファは恐れて食事の場から離れました。

こういう優柔不断な言行不一致な態度を見て、パウロは面前でケファを激しくなじって批判をしました。「あなたは自由に振る舞っていながら、またも食事規定に従ってしまった」と。これはガラテヤの2章の後半に出てきます。

つまり、ということは裏返せば、イエス・キリストにおける福音にあずかって、律法のあの厳しい規定を打ち破り、キリストにある自由と愛と救いにあずかるのだということを、ケファさん、あなたも私も共有したはずではないですか、と主張します。

どこで共有したかといったら、エルサレムを訪問した2週間の間にケファとやり取りして、イエス・キリストの福音が何であるかという基本的な理解を確認し合った時です。それが前提になっているから、「今どうしてそれを守らないのですか」と言って、パウロはアンティオキアでペテロをなじって批判をしたのです。

そのページの最後の段落だけちょっと読みます。

神学的な非首尾一貫性と妥協用意というものは、現代的であるかもしれないが、それが、真理問題が提起されたところでは、竹を割ったように筋を通すパウロの思考と生き方に対して妥当しない。また「福音の真理」の固守は彼にとって、後の発見などではない。むしろ彼は、自己の生の根底的変革をこうむってから約3年後の最初のエルサレム訪問時に既に、この決定的な点で譲れない態度によって、ペテロとヤコブに強烈な印象を与えたのであろうと思うわけです。

いかに、なぜこの訪問が2週間で終わったのか、またその直後どう行動したかについては、幾つか推測し得るにしても、ガラテヤ1章は何も語っていません。

最後のⅢの「パウロにとってのイエス」という問題に移ります。「パウロ書簡に見られる共観福音書（マタイ、マルコ、ルカの三福音書）の中のイエス語録への示唆及び関連内容」の事柄です。

パウロ書簡は、共観福音書における生前のイエスの言葉に対する豊富な示唆、もしくは事柄上の関連を含んでいると思われます。

新約聖書で最初に手紙が書かれたのはどこかというところ、新約聖書における諸文書の中で、最初に書かれた、パウロがテサロニケに宛てた手紙で、紀元49年頃です。イエスの生涯を描いた四つの福音書の中で最初に書かれたのはマルコ福音書だと言われているのですけれども、マルコ福音書は紀元70年過ぎてから書かれていますから、20年以上の差があるわけです。

ところが、不思議とパウロ書簡の中に出てくる言葉は、イエスの生涯を伝記的につづるといことはほとんどしていないのですね。非常にシステムティックに考える人だから、福音の本質的なことを中心に語ります。

これに対して20年たって、マタイやルカやマルコなどは、「いや、やはりイエスの生涯をきちんと記録にとどめるべきだ」と考えて、それぞれお互いには知らないのですけれども、聞いた伝承に基づいて、イエスの生涯を語り継いでいきました。

ですから、イエスが地上でどういうことをしたかという

のは、基本的には、マタイ、マルコ、ルカの福音書の中に織り込まれています。パウロはそういうことを語っていないので、疑問が起こります。パウロはそもそも地上のイエスのことに関心がないのだと。自分なりに認識したキリスト理解に基づいて、キリスト教を構築し説いているのだという批判になるわけです。

ところがパウロの書簡は49年が最初ですが、書かれた複数の手紙をつぶさに読みますと、その中に明らかに20年、30年後に書かれたマルコ、ルカ、マタイの福音書の中のイエスの生涯における振る舞い（教え、奇跡、論争、事件など）についてよく知っているのです。そういうことがパウロ書簡の中に散見されます。

例えば結婚の問題が取り上げられる箇所です。それは福音書のマルコ福音書10章1節以下で、パリサイ人たちが「夫が妻と離縁してもいいでしょうか」とイエスに議論を吹っかけに来たときに、イエスが「いや、離縁をしてはいけない」と主張する場面がありますね。ああいうところを、パウロは後にギリシャのコリントの信徒たちに手紙を書いて戒める時にも、かつてのイエスの主張を引き合いに出します。考えてみますと、イエスはパレスチナのユダヤ人社会の外には行ったことがありません。だから、ユダヤ人が異邦人と結婚するなんてことはあり得ないわけです。ただ、ユダヤ人同士で離婚する問題があったので、それをイエスの下で論争を吹っかけてきたのでした。コリントの信徒への手紙の中でコリント教会における結婚・離婚の問題は、イエス時代とは地理的にも時間的（20年以上の隔たり）にも異なります。すなわち、パレスチナのユダヤ人・ユダヤ教の壁を突き破って、今やユダヤ教から見れば、異邦人・異教の世界であるヘレニズム文化の一角にあるギリシャの一都市コリントの地に、使徒パウロは開拓伝道をし、キリストの福音を宣べ伝え、コリント教会（ギリシャ人とユダヤ人の混成によるキリスト教徒の群れ）を設立しました。しかしパウロがその教会を離れた後に、コリント教会内で、入信して信仰に熱心な教会員の夫婦関係のことで問題が起きました。このことがコリントの信徒への第一の手紙7章で取り上げられています。

第一コリント書7章で、今、異教徒である夫あるいは妻と、これ以上夫婦生活をしていいかどうか。価値観も違って来る。クリスチャンになって熱心になった妻あるいは夫が純粋な信仰生活を維持するために、考え方もいろいろ違う夫あるいは妻と、これ以上生活しないほうがいいのではないか。熱心であればあるほどそう考えるのです。そこで、「離縁していいでしょうか」とパウロ先生に聞くわけ

です。これに対してパウロは使徒的権威をもって、「いや、離縁をしてはいけない」と勧告します。

一方では、イエスの時代のことを持ち出して、イエスはこう言って離縁してはいけないと言ったけれども、異教徒であるパートナーとの結婚の問題を、イエスは知りません。パウロはそのことを知っています。しかし異邦人教会における信徒夫婦の場合においても「離縁してはいけない」と戒めます。パウロは使徒的権威をもって「私が命ずる」と言い換えるのです。

こうした論争の中で、マルコ福音書10章に記録された離縁をめぐる論争物語を、パウロは知っているのです。それを前提にさらに展開して言及します。これは1つの例ですけれども、ずらっと挙げると例えばこんなにたくさん出てきます。左側はパウロ書簡、右側はマタイ、マルコ、ルカですが、出てきます。

さて第2番目に、「パウロのイエス・キリスト認識とは何か」という問題に移ります。「肉に従ってキリストを知ることをしてはいけない」という箇所です。

ダマスコ途上での根本的な回心は、先ほどカラヴァッジョの絵を御一緒に見ましたけれども、イエスとその十字架死に対する認識・判断の根本的変化でありました。つまり何か不思議な幻のような、光り輝きを見て、馬から落ちたという単純なことではなくて、彼の革新的な認識の変化がそこで起こったというわけです。

この転換を示唆する箇所が第2コリント書5章の16節であると思われます。そこで、この論争の箇所を中心に見たいと思います。

「従って、私たちは今後だれをも、肉に従って知ることはしません。私たちが肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ることはしません」（私訳）という箇所です。

問題は16節後半の「肉に従って」、つまり「肉に従ってキリストを知っていたとしても、もうそういう知り方はしません」と言っている箇所ですが、この「肉に従って」はギリシャ語の「カタサルカ」ですが、これは目的語の「キリスト」にかかるのか、動詞の「知る」にかかるのか、という釈義上の論争です。もしもキリストにかかるのであれば、肉体的なキリスト、すなわち自然の身体的・地上的なキリストということになり、この節は、パウロが使徒として召命を受けて以来、もはや地上の史的なイエスへの関心を持たず、彼の神学においては福音宣教の内容（ケリュグマ）である「イエスの十字架の死と復活」が根本的な意味を持つのだと言ってい

る、というようにしばしば理解されたのです。

とりわけ、先ほど挙げたブルトマンとその学派はこの一節を、かつての宗教史学派のブセットがしたように、ケリュグマに集中する積義の正当性を根拠づける箇所として解しました。それによれば、パウロはここで「肉に従ったキリスト」、すなわち肉的、この世的に存在しているキリストなどというものを、信仰にとっては無意味なもの、事実関係がどうであるかというのは、あまり信仰にとって意味がないこととして拒否したのだ。それゆえに新約聖書の積義家たちにとって、歴史的イエスの問題は文献的に解き得ない問題とみなされるばかりか、神学的な邪道としても回避されねばならない。正しい信仰は、それが十字架と復活のケリュグマという信仰の事柄に基礎づけられるゆえに、ナザレのイエスのどんな伝記をも必要としないのだ。

さらに、16節のいわゆる「生活の座」の文脈として、パウロの敵対者たちとの論争が視野に入れられる。パウロの使徒性の失墜を狙ってコリントの教会員たちを扇動した彼らは、(敵対者の出現と規定については、ケーゼマンとかゲオルギなどの学者によっていろいろな見解はあるのですけれども) 自分の使徒的な権威づけを直接・間接にイエスに遡らせ、自分たちは地上のイエスのことを知らされていると言って、特定のイエス像を伝達し(第2コリント11章4節)、肉的(地上的)イエスについてまるで無知な、後で回心したパウロは使徒に値しないと非難し反目したが、まさにこれらの敵対者にパウロはここで反論しているのだ、と解釈するのです。ちょっとややこしい話になってきますが。

しかし、最近の積義家たちが新しく見ているように、少なくともこのテキストの用法上、「肉に従って」という語が目的語の「キリスト」の前に置かれるのは、この言葉が副詞的に用いられて動詞にかかり、いわば「肉的に知る」という認識の仕方の特徴づけていることを指し示す。これは私の『パウロの生涯と神学』(2005年初版、2021年増補改訂版、教文館42~47頁)という書物でも述べています。

しかも第2コリント書において、特定のイエス像、キリスト論はテーマ化されておらず、むしろ一貫してキリストを認識する側の使徒性がテーマ化され、注目され続けているのです。ゲルト・タイセンも私と同一の見解です。最初に述べたタイセンの書物の18、19ページでそう述べています。

そこで、「キリストを肉的に知った」とは、パウロが自分の生涯の中で全く肉的に、従ってその結果、犯罪的な仕方

まりスカンダロン(躓き)のゆえに、ヘレニズム・キリスト教徒への徹底的な迫害者として振る舞った時期がある、という事実を指していると思われます。

しかし、この「肉的」なキリスト判断、つまりイエスは律法違反者であったということは、ダマスコにおける神の啓示による回心以来克服され、キリストに対する急激な判断転換をもたらした。その「今」が起こったと。つまり彼は、神に呪われ木に架けられたという聖句(申命記21:23。ガラテヤ書3:13に引用)が、実は「私たちのために」神が呪いにかけて義人の死に関する言及であったことを知った。このことはガラテヤ書3章13節で表明され、また、上で取り挙げている16節に先立つ14~15節の内容とも一致します。

イエスの教えと行動が、神との同等性を求める冒瀆的な権威主張に根差すのではなく、神の意志に従う苦難の「神の僕」が担う課題遂行として生じたことを、(16節の先の21節の背後にある)イザヤ書53章でパウロは悟ったのだ。ここにおいて、彼が出会い、認識する高挙のキリストは、十字架の死を遂げた地上のイエスと同一のお方になるのだ、ということですね。そのことがあります。

さて、16節に関する以上の考察からすれば、パウロが史的イエスに無関心であるという結論は決して出てきません。しかし同時に、パウロが地上のイエスを個人的に知っていたかどうかについては、この節は積極的にも消極的にも手がかりを与えていません。ルカが報告するように、パウロがエルサレムの律法学者のガマリエル一世の下で薫陶を受けたとすれば、これは使徒言行録22章3節その他で述べていますけれども、パウロがエルサレムで、受難の過程にあったイエスを目撃したかもしれないという興味深い可能性を、全く拭い去ることはできないと思います。したがってさらに、彼のキリスト教徒へのあの憎しみは、早くともこの時期に醸成され始めていたと推測もするのです。

しかし、もしも個人的な接触によるイエスとの敵対関係が既にあったとすれば、パウロはこれを後に表明することによって、突如彼を回心に至らせた神との一方的な恵みを、もっと鮮明かつ対照的に、劇的に、あるいは説得的に証言したはずで。ところが、パウロのどの書簡にも、それらしき言及は見当たらない。むしろ、彼は専らキリスト教会に敵対し、迫害したことを、繰り返して指摘しているのです。そういうわけで、上に述べたような推測は、何ら根拠を持っていないと思います。

最後に、上で述べたように、使徒の肉的でない霊的なキリスト認識というのはどういうものなのでしょうか。少なくとも

も彼固有の仕方地上のイエスへの関心を深めていると思われま

す。オットー・ミッヒェルというローマ書の注解書も書いたドイツの新約学者がいます。この方は80歳過ぎで、私は水曜日の祈祷会で彼が証したのを聞いて、語りかけたこともあります。このミッヒェルの次の見解は受容されてよいと思います。

「霊的認識とは、決して歴史的経験を止揚したり危険にさらしたりすることではなく、むしろ反対に、史的現象を新たな次元へと深化し、獲得する事である」と述べました。

言わば使徒は、イエスがその生涯の中で振る舞ったことの本質的な意味を、その生涯の最後に起こった歴史的な出来事（十字架と復活）の中に決定的に見ようとしたと思われるのです。

以上をもって一応終えます。

これは使徒パウロ（巻末資料図7）で、有名なルーベンスが描いたものです。1611年、マドリーのプラド美術館にあったものです。

ところがそれがどういう訳か、私は2002年8月から7ヶ月間、アメリカ南部のアトランタのエモリー大学で客員研究員をしていましたときに、国内のいくつかの都市と大学を訪問したことがあります。その1つがハーバード大学でした。ハーバード大学の美術館に入ったら、これがあったのです。私は初めてその肖像画を見た時、強烈に引きつけられて、ルーベンスはこんなふう想像して描いたのだと知りました。老齢なパウロ像です。実際にこんな顔をしていたのかどうか分かりませんが。

それからもう1つお見せしたいのは、イエス・キリストの顔（巻末資料図1）です。イエス・キリストの顔を思い浮かべて描くと、誰もが面長で長い黒髪と濃いひげを蓄えた容姿と、そこから放たれる静かなまなざしを思い浮かべるのではないのでしょうか。新約聖書ではイエスの外観についてはほとんど沈黙しているというのに、実はモーセが登ったと言われるシナイ山の麓に建てられた修道院の中に、イエスの肖像画が掛かっていました。シナイ半島は荒涼たる砂漠ですが、最南端に緑の樹木が生えているところがあり、そこに聖カタリナ修道院というのがあり、その中で圧倒的な存在感を醸し出す見事なイエスのアイコン像を私は見たのです。

旧約聖書以来、神を形にしてはいけなく、それは偶像崇拜に陥るからだという戒めのゆえに、イエス像を描いて形にすることをしないのですけれども、この6世紀に制作さ

れたと思われる肖像画を見て、引き寄せられる強い印象を持ちました。本日イエスのことも語ったので、こんな顔をしていたのかなと想像してみます。

よく見ると、右目と左目の形と眼光が違います。向かって左の目は慈悲深いイエスのまなざし、右の目は厳しい神の義と、人の心の中を見抜く、厳しい目ですね。この2つが異なる。そういう説明を私はその修道院で聞いたので、「なるほど、そういう思いを込めて描いたのだらうな」と思いました。

以上をもって終えます。

小菅（司会） 朴先生、ご講演ありがとうございました。大変聞き応えのある、どう考えていいのか、いろいろ私の中にも疑問があるのですが、皆さんからぜひ率直なご意見、ご質問を頂きたいと思います。

申し遅れましたが、私は、この慶應義塾大学の教授で小菅隼人と申します。教養研究センターの所員で、この研究会のコーディネートをしております。

私の専門はシェイクスピアでございまして、演劇あるいは文学の方面から研究活動が続けておりますが、最初に申しましたように私自身はクリスチャンでありますけれども、先生には、本日はキリスト教を学術的な面からお話しただいたと思っています。

それに限らず、皆さんの中からお感想でもご質問でも頂ければと思います。本日の講演は講演録にして冊子に載せたいと思っております。皆さんのご質問もその冊子の中に掲載させていただきます。ライブリーな議論ができればと思います。

皆さんが考えている間に私から質問させていただきます。根本的な質問で恐縮なのですが、パウロは結局キリストの何に打たれたのかとよく考えるのです。つまりキリストの生涯の中で、そのキリストが、先生のご講演の中にあつたように、非常にユダヤ教の保守派に対して革命的、革新的な活動をしたということなのか、十字架にかけられて結局は、非常にある意味では悲惨な死ですよね。そういう死を遂げたということが彼にとって非常に影響を与えたのか、あるいはその復活ということを信じたのか。そういうことなのかなと思うのですが、パウロはキリストのどこにということが疑問に浮かびまして、今の先生のご講演の中で、そのキリストの人となりというのをケファとかあるいはヤコブに尋ねたかもしれないというのは、とても示唆的ではあるのですが、先生、どう考えたらいいかご教示いただければと思います。

朴 ルカが書いた使徒言行録の中では、9章が最初のドラマティックな転換の場面ですけれども、光が照らして倒れたときに声が聞こえて、「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか」と言うのです。ルカ的な理解で言えば、ダマスコにいるキリスト者の群れ、つまり初期のキリスト教会を迫害するために行った。そのことは実は、イエスを迫害して死に追いやる行為だと、ルカは描こうとしているわけです。

パウロの書簡の中でも、先ほどガラテヤ書の伝記的な回顧のところでも言っていますけれども、いろいろ改宗する、あるいは回心する、あるいは他宗教からキリスト教に来るという場合にも、いろいろな回心の仕方があって、だんだん理解が深まってついに納得するという行き方と、そうではなくて非常にドラマティックに、家の玄関を開けて路面に出た途端、突然車にひかれて死んでしまうような、そういう劇的な転換の仕方がありますけれども、パウロは徐々にキリスト教への関心を深めていって回心したというよりは、迫害する途中でしたから、非常に劇的な転換の仕方、それは言葉に表せないものだったと思います。

そのときに、ルカによる使徒言行録の記述では、「なぜ私を迫害するのか」というあの声は、パウロは何もそういう言い方はしていないのだけれども、いろいろな手紙の中でも認識が根本的に変わったという言い方が主流で、徐々に理解を深めていったという考えはあまりないのですね。

ですから、そのところが研究者によって心理的な分析をして、パウロは徐々にキリスト教徒へ、憎しみから同情へ、同情から心を開いてキリスト教徒になっていったという言い方をする人もいますのですけれども、パウロの場合はマルティン・ルターとはかなり違う。ルターは苦悩しながらついに悟ったわけですが、パウロの場合は違うのですね。

それは何かと云ったら、非常にドラマティックで、しかもダマスコ途上で出会ったキリストというのは、もう地上にはいないわけです。復活したキリストであって、しかしそれはたわいもない幻かということ、パウロにとっては現実に見ているイエスよりも非常にリアルな存在として自分に臨んだという、そういう理解は揺るがないのです。

ただ、彼がそういうことで律法とは何だったのか。キリスト教徒を迫害するほどの律法。だって、イエスを迫害したのはイエスが律法破りだったからやったわけで、そういう彼が急に転向したわけですから、それは木がポキンと折れるような、そういうものであったと思います。

もう1つ大切なのは、途上で倒れたときにはある種の劇的な変換があったけれども、明らかにアラビアに3年いた

とき、そしてその後、十何年宣教活動をしたときに、あれは何だったのか、あれはどういう意味があったのか、繰り返し繰り返し自分の中で深めていったのだろうと。それがあの手紙の中には出てくるだろうと思うのですね。そんなことになります。

小菅 (司会) 皆さんの中からいかがでしょうか。

発言者 A 本日は貴重なお話を本当にありがとうございます。近所に住んでおります。息子が慶應義塾大学を出ております。

分からないことがあるのですけれども、大罪と小罪についてご説明をお願いしたいのですけれども。

朴 講演の中では大罪と小罪については何も言及していなかったもので、急に言われてどういうことだろうかと逆にお尋ねします。

発言者 A 金曜日にお肉を食べることが大罪で、灰の水曜日にお肉を食べるのが小罪というふうに聞いております。

朴 それはキリスト教の伝統の中ですか？

発言者 A はい。キリスト教の中で。カトリックです。カトリックの中で。

朴 それは初めて聞いたのですけれども、それは受難週などで身を慎んで食を絶つ、つまり断食をするということがありますけれども、その食物の種類によって大罪、小罪と分けるというのは、私、今初めて聞いたものですから。むしろお教えいただきたいと思います。

いずれにしてもユダヤ教の中で食物規定というのはとても厳格で、地上を食うものを食べてはいけないとか、いろいろな規定がありますよね。そういうことで異教徒と食事、付き合うどころか食事なんてとてもできないという考えが当時からありましたから、そういう中でキリスト教徒になった異邦人とユダヤ人、ユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャンが食事の規定にこだわらずに一緒に食事をしているというのは革命的なことであって、ケファつまりペテロはうわさを聞いてそこにやってきて、イエス・キリストの福音においては、そういうことにとらわれてはならないのであり、そのことによって罪があるとかないとか言うべきではないと信じて、一緒に付き合っていたわけで

す。ところが、エルサレムからやってきたヤコブ派の人は厳格派ですから、ペテロを非難したわけですね。「あなたは規定を破っている」と言って非難したので、彼は後ずさりしてしまったわけですね。そういう厳しい問題がありましたね。

今日はどうでしょうか。イスラムではもちろん豚肉は食べませんし、独自の食事方法がありますけれども、食物規定というのはそれにこだわっている人、信じている人にとっては非常に欠かせない、大きなテーマだろうと思います。

ただ、今言った大罪、小罪というのはちょっと私も分からないので、お教えいただきたいなと思います。

発言者 A ありがとうございます。

小菅 (司会) どなたかほかにいかがですか。

発言者 B 本日はとても刺激になるというか、すごく勉強になりました。

私、慶應義塾大学の理工学部で中国語を教えております、そしてここの教養研究センターの副所長をしております B と申します。よろしく申し上げます。

私は中国仏教とか道教とか、中国の民間信仰とその小説・演劇の関係みたいなことを少し勉強しております。ふだんはどちらかという仏教とか道教とかの経典を読むことが多いのですが、聖書も親しんでおりますので、本日のお話はすごく「そうなのか」というのが、ずっともやもやしていたのが、パウロの書簡で言っているケリユグマのキリストと、いわゆる史的イエスはどういう関係にあるのかなというのが、さっきの「従って」という言葉のわかり方で、こういう捉え方、あるいはかつての論争があったのだというのが、とても勉強になりました。

最後に先生が引用されたミッシェルの言葉で、「史的現象を新たな次元へと深化し、獲得する」という、この言葉を史的イエスとケリユグマのキリストの関係に当てはめていくと、史的イエスを否定して、そんなことは興味がないのだと、私はケリユグマのキリストをやるのだという解釈ではなく、史的イエスを言わば深めていくことでケリユグマのキリストにつながるのだという理解を、ミッシェルの言葉からしてもよいのでしょうかという。

朴 多分そうだと思います。別の言葉で言うと「現象の背後にある本質を見る」ということだろうと思うのです。

発言者 B そうすると逆に今度は、ケリユグマのキリストなんていうのはパウロが考えた違うものであって、史的イエスだけを考えていこうみたいなのも、それは少なくともミッシェルのこの言葉からは、それもだめだよということが導き出されると。

朴 そういうことになると思います。

発言者 B それからもう1つ、2ページの「イエスは実在したか」ということで、ナポレオンのこのジョークがあって、おもしろい話だなと思ったところに、その続きとか、この問題はヴィーラントのジョークによって見過ごすわけにはいかない議論を研究者間に引き起こした」ということで、パウアーという方、ヘーゲルの弟子というところで書いているのですが、私、不勉強で初めてこの名前を知って、パウアーたちがこの一過性の言わばジョークにとどまらない、より何か大きな問題になったということを示唆されているのかとも思うのですが、パウアーたちが議論したこの続きはどんなことなのかというのをお教えいただければと思います。

朴 タイセンはそのことに少し触れただけであって、具体的にどういう論争があったということは紹介していないのですから、私も実はその深めた議論というのは触れてはいないわけです。

ただ、かなりジョークではなくて、どうも実在性の観点は怪しいということ論証しようとしている。そういう研究なのです。そういうのが次から次へと現れた。それはいろいろ、学者の名前挙げて数ページにわたって紹介はしていますので、関心があればぜひそれをお読みになったらいいのではないかと思います。

発言者 B どうもありがとうございます。

小菅 (司会) ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。どんなことでも結構です。

発言者 C 本日は貴重なお話をありがとうございます。経済学部1年生です。

初めて聞くお話ばかりで自分の中で消化し切れてはいないのですが、どうしてパウロはほかの指導的な人たちへの従属的依存関係に入ったと思われなくなかったのか。どうして自分の意思で、キリストの啓示によってエルサレムに行ったというか、どうしてほかの人に影響されたと思われ

たくなかったのだらうと思いました。教えていただきたいです。

朴 自分が使徒として、つまりユダヤ教徒から回心して、異邦人への使徒とされた、コーリング、召し出されたというのは、専らよみがえりのキリストの現臨、その場に現れるということに依拠しているのだ、それ以外の何物でもないのだと、そこに徹頭徹尾固執しているということですね。ですから、エルサレムの原始教団の人たちに承認されて使徒になっているわけではないということは、一方でも非常にはっきり言うのです。

でも、もう一方では会いに行っているわけです。そしてケファ（ペテロ）のことは、第1コリント書の中にも出てくるのです。そこでは、もう何年もたっているのにケファといがみ合っているかということ、そんなことはないのです。非常に良好な関係にいて、地上を生きてイエスの下で薫陶を受けた弟子たちとの関係というのは、決してないがしろにはしていない。

ただ、自分が使徒として立てられたのは、彼らの権威によってではないのだという。この縦と横の関係というのは矛盾するようだけれども、そこは明確にしているということです。

ですから、使徒パウロが3年間もエルサレムに行かなかったということの伝記を語る背景にあるものは、ガラテヤ書の論争的な戦いがあるのですよ。何かといたら、律法やユダヤ教の規定というのは重要だと。たとえユダヤ教徒からキリスト教徒に変わったとしても、旧約聖書、ユダヤ教の持っていたよき習わし、よき律法、そういうものは重んずるべきだと。そうしながら新しい教会で信仰を続け、リーダーシップを執っていくべきだという、言わばそういうユダヤ主義的なキリスト教徒が、教会を攪乱していました。だからパウロはそういう人と戦いながら、ガラテヤ書を書き始めているのですよ。

そういうガラテヤ書の手紙の背景を考えたときに、彼らに依拠している、つまりエルサレムというのは、ある意味では初期の原始キリスト教団ではあるけれども、ユダヤ教の伝統とは切っても切れない関係にありましたので、そこに容易に依存するということをパウロはしたくない、というのがあったと思います。

そういうのがこのガラテヤ書を書くコンテクストにあるものですから、ここではこう言っているし、ほかの箇所でも、良好な関係にあったとしても、自分の使徒的な使命の根拠というのは、ダマスコ途上におけるキリストとの出会

い以外の何物でもないのだという。余りにも強烈なのですね、それが。だから現実に地上のイエスに会っていること以上に強烈だったと思います。

しかし申しますけれども、幻のキリストを追い続けていたかということそうではなくて、結婚をめぐる規定、イエスが地上で語ったことなど、ほかにもいっぱいあるのですけれども、そういうことは伝承として聞いています。それから聖餐式を御存じですか。教会でパンとブドウ酒を分かち合って、キリストが十字架にかかったときの体と血を表すパンとブドウ酒を教会では祝うのですね。そのときに、十字架にかかる前にイエスが弟子たちと「最後の晩餐」、レオナルド・ダヴィンチが描いたように、あの最後の晩餐をしたイエスの言葉すなわち「このパンは私が十字架上で裂かれる体だ。このブドウ酒というのはそこで流れる血だ。しかしそれは残酷というよりもむしろ、それによってあなたたちにあがないをもたらすものなのだ」といった制定の言葉があります。そういうのはパウロの書簡の中で、第1コリント10章、11章でも引用します。

だから使徒パウロは、地上で語ったイエスの教えとか戒めというものは、権威ある言葉として大切にしているのです。しかし自分が使徒となったのは、何か言い伝えによって、あるいは初代の教会の使徒によって成り立っているものではないということ、もう一方でははっきり言うわけです。この2つの面を彼は述べている。依拠していないということのコンテクストは、ガラテヤ書の文脈が論争的ですから、そういうことを言ってみせているということだと思いますね。でも、とても大切なところです。

発言者 C ありがとうございます。

小菅 (司会) ありがとうございます。

朴 本日初めてお話を聞いたということですが、初めてキリスト教に触れ、こういう話を聞いて、理解していただけましたでしょうか。

発言者 C 幼稚園がカトリックの幼稚園で、劇とかでキリストの誕生とかを演じたという、かすかな記憶は残っているのですけれども、すごくいっぱいお話いただいたので頑張ってメモして、自分なりに考えていろいろご質問させていただいて、とても分かりやすいご説明ありがとうございました。

朴 そう言っていたいてありがたいと思います。

小菅 (司会) ありがとうございます。
ほかにいかがでしょうか。どなたでも。
お願いします。

発言者 D 本日は貴重なお話ありがとうございました。
私は慶應義塾大学の理工学部1年のDと申します。
すごく素朴な質問なのですが、「スカンダロン
(躓き)」というのがあるのですが、こちらはどのよ
うな意味があるのか、ご教授願いたいです。

朴 それは何ページでしたか。

発言者 D 資料だと7ページです。

朴 真ん中ですかね。

発言者 D はい。

朴 「躓き」というのは、イエスが十字架にかけられたと
いうよりも、ユダヤ教のリーダーたちはことごとく規定を
破るイエスの斬新な神の国運動は許せないと、ことごとく
対立していったわけです。しかも自らが「神の子」だと、
神を冒瀆している。結局民衆を扇動して、イエスは社会の
反乱者だということで、イエスを十字架に追いやったわけ
です。そのイエスがメシア(救い主)だとは信じ難い躓き
となる訳です。

ただ、死刑というのは当時、パレスチナはローマの支配
下にあったので、死刑の執行権はないのです。

一般の種々の規定や争いについては、ローマは植民地
化していた国々の自主権と自治権というのは認めていま
した。しかし、死刑執行の権利はないのです。それはロー
マの法に基づいて、そしてローマ軍の指揮下で執行する
ということで、イエスはローマの刑に処せられて死んだ
わけです。

経過はそういうことなのですが、だからユダヤ教の指
導者たちと同じように、パウロにとっても、つまりサウ
ロ、ユダヤ教徒であったときも、イエスが自ら「神の子で
ある」と主張したことや、そしてましてや、死んだはずの
イエスをよみがえったメシア・キリストだと担ぎ上げるキ
リスト教徒に対しては、許容できないとして、これが「躓
き」になるのです。つまり納得いかない。それは憤りの対

象でしかない。それが「スカンダロン(躓き)」なのです。
そういう一時期が自分にあったということが、肉に従った
キリスト認識の仕方だったということです。
よろしいでしょうか。

発言者 D ありがとうございます。

小菅 (司会) ありがとうございます。
ほかにいかがでしょうか。

先生、私の場合、キリスト教に小さい頃に触れて、キリ
ストの生涯であったり、パウロの回心であったり、あるい
はペトロがキリストの弟子になる場面であるとか、そうい
う人物たちの劇的な物語に、私はとても魅力を感じてキリ
スト教に入ってしまったのだと思います。

先生が引用して下さったいろいろな芸術家たちも、そ
ういう思いでそれを具体化していったということなのだろ
うと思います。

ただ、先生の本日のお話を聞いて、それが正しいキリス
ト教、宗教へのアプローチなのかどうか。結局はそういう
ドラマティックな物語を自分の中で想像していくのがいい
のか、それともそういうふう具体化せずに、自分の中で
信仰とか神とかそういうものを、むしろ抽象的に考えてい
くべきなのかということが、私にとっては本日の話はと
てもまた示唆的に響きました。

朴 それはいろいろな展開の仕方があると思います。日本
の文学者でも、例えばカトリックだったら遠藤周作とか、
プロテスタントだったら三浦綾子とか、ヒューマンな次元
からアプローチしながらキリストに到達するという、ああ
いうやり方もあると思いますし、いろいろなやり方があっ
ていいと思うのです。それでたどり着くということになる
のだと思います。

小菅 (司会) 分かりました。

今、先生、私たち大学という場において、多分喫緊の課題
であるのは、学生たちがいわゆるカルトと呼ばれる宗教み
たいなもの、ああいうものからある意味では正しく身を守
る、そして宗教というものを正しく、教養として身につけ
ていくことをさせないと、といいますか、そういう
ふう指導しないといけないと思っています。

若い学生たちが、キリスト教というものを正しく理解し
ていくためにどういうことをしたらいいかご教授いただけ
ればと思います。

朴 最近問題になっていることですが、欧米ではあ
あいうカルト的な宗教と伝統的な宗教は、明確に区別して
います。

カルト的宗教はやっぱり社会問題化していく宗教、疑似
宗教化していく。私がいたテュービンゲンでは、モルトマン
という教授が言っています。テュービンゲンの中にも
統一教会が入ってきて、パンフレットを配っていたので、
びっくりしてしまったのです。あれは結局モルトマンが
言った「ゲシェフト レリギオン」、つまり「商売の宗教」
だということでしょう。だから同じ宗教といたって、
ちゃんと見分けられる宗教的センスが非常に重要になって
くる。

ちょっと話は違いますけれども、例えば東南アジアなど
では主流の宗教というのはイスラムかヒンドゥーか仏教で
すね。儒教はちょっと違うと思うのですが、彼らは
生活の中にきちんとそれが身について、それに基づいた宗
教を持って生きていますから、そういう中で新新宗教とい
うか、ああいうカルト的な宗教はまず入る余地がないので
す。まともに信じているからだと思います。

日本では宗教というのは怪しいものだと。もちろん宗教
は伝来で仏教や神道がありますけれども、これは通過儀礼
というか、習俗化した宗教としてはあるにしても、真剣に
日々の生活や思考の中で宗教が生きているかという、そ
んなことないですよ。思い出したら行くぐらいのもので
すから。

しかし、宗教というのは、本来はとても深いもので、哲学
にも通じますし文学にも通じますけれども、そういう人間
の教養にもなるし、広がりがあり豊かにするものなのだと
いう認識は少なくとも持ってほしいなという感じはします。

宗教というのは、もともとどうも怪しいものだという考
えは、考え直す必要があるのではないかという感じはしま
したね。

小菅 (司会) オウム真理教の事件以来、宗教には近づか
ないのが無難という社会的な雰囲気が出来上がったような
気がします。そして、安倍元首相の銃撃事件からこの問題
が再燃してきたように思います。特定の宗教を信じること
は、もちろん、個人の問題ですが、悪意をもった勧
誘から身を守る術というものがないと、容易に若者たちが
その餌食になりやすいと、大学教員とすれば危機感を感じ
ています。

朴 大切なことだと思います。

小菅 (司会)

それではちょうど時間ということになりましたので、朴
先生、本日はありがとうございました。

朴 どうもご拝聴くださって。(拍手)

新約の細かい話になってくると、もうついていけないと
言われるかと思っていましたけれども、多少はついてきて
くださったかなと思います。ありがとうございました。

小菅 (司会) ありがとうございました。

——了——

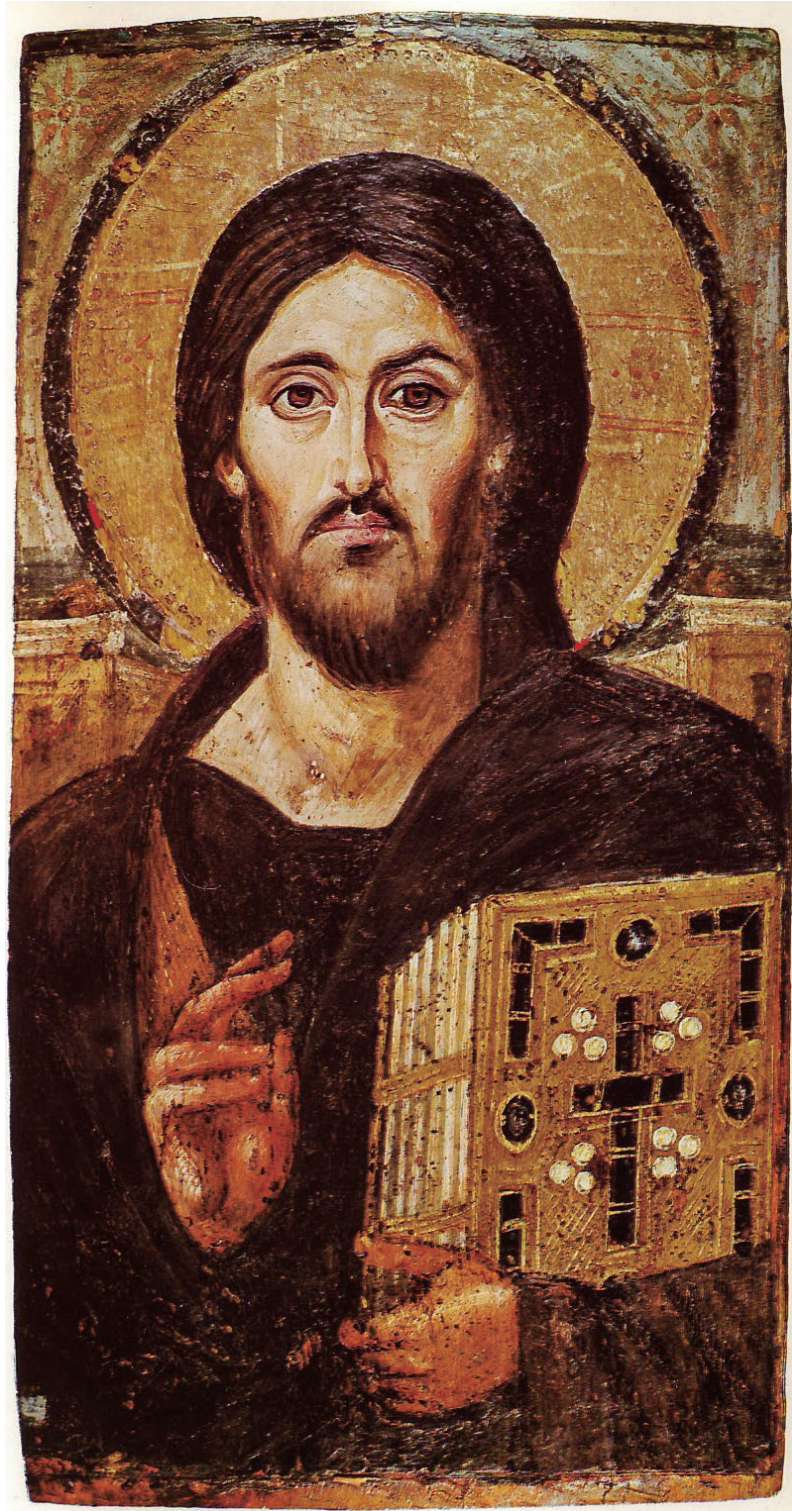


図1 「蠟画法によるイイスス・ハリストス（イエス・キリスト）のイコン
（6世紀頃、シナイ半島、聖カタリナ修道院所蔵）」
（2024年3月1日（金）9:00 UTCの版）『ウィキペディア日本語版』

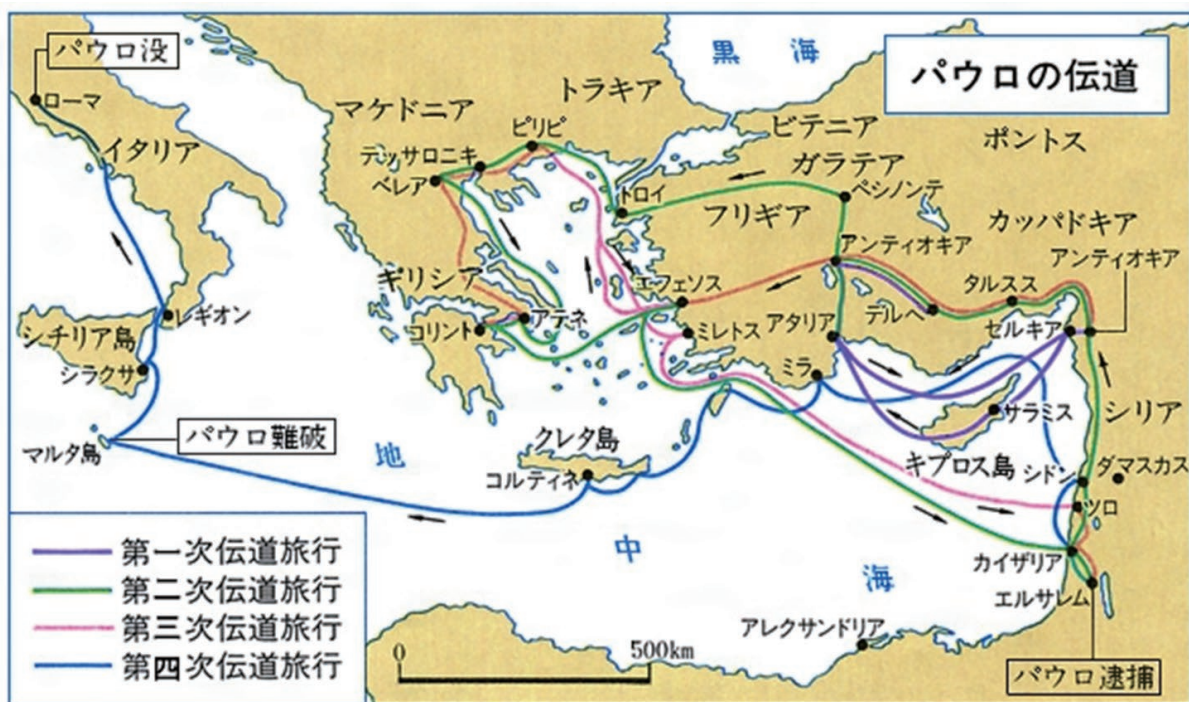


図2 パウロの伝道



図3 パウロ第1回伝道旅行



図4 パウロ第2回伝道旅行



図5 パウロ第三回伝道旅行



図6 聖パウロの回心 (Conversione di sa Paolo) カラヴァッジョ作 1600年、230 × 175cm、油彩・画布 サンタ・マリア・デル・ポポロ聖堂チェラージ礼拝堂



図7 ルーベンス作「聖パウロ」、1611年頃、マドリード、プラド美術館、1.07 × 0.83 m

題：「キリスト教の源流—イエスとパウロ—」

朴 憲郁

*講演当日の配布資料から加筆修正しています

〈はじめに〉

キリスト教の源流といえば、ユダヤ教から袂を分かって神の国運動を起こしたナザレ人イエスである。だが原始キリスト教団を経てパレスチナ領域に進出し、異邦世界のヘレニズム文化の諸民族に福音を宣べ伝えたのは使徒パウロである。彼によってキリスト教の確固たる地歩が固められた。この二人の人物を巡る論争的考察をご一緒に学ぶ。

使徒パウロの手紙の中に展開されている神学全体の中心に、信仰の対象としてのイエス・キリストが位置を占めている。パウロは当時、ユダヤの地から遠く離れた異邦の地であるガラテヤ、テサロニケ、フィリピ、コリントなどの人々に福音を宣べ伝えて設立した。いわゆるヘレニズムの諸教会の信徒に向けて、ナザレのイエスの生涯、とくにその終わりに起こった十字架の死と復活のできごとが、全世界の民に対する神の決定的な救いの実現なのだということを、教会の具体的かつ実践的な諸問題の取り扱いの中で、牧会者、伝道者、神学者として説いた。新約聖書27巻中の著者の数からしても、またイエス・キリストの福音の神学的な思索と普遍的な理解を深めた点においても、まず筆頭にパウロの名を挙げることができるので、その神学が、使徒と使徒後の時代の教会形成にとって重要かつ不可欠な基礎だったことは確かである。

地上を生きたナザレ人イエス（＝史的イエス）を神の子キリスト（＝ケリュグマのキリスト）と告白して布教した初期キリスト教、すなわち原始キリスト教団および後に回心して使徒となったパウロの信仰が、パウロ神学の中心にある（コリントの信徒への手紙—15章3節～11節参照）。

3) 最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりのわたしたちの罪のために死んだこと、4) 葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりの三日目に復活したこと、5) ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。6) 次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています。7) 次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、8) そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。9) わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。10) 神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。11) とにかく、わたしにしても彼らにしても、このように宣べ伝えているのですし、あなたがたはこのように信じたのでした。

I 新約聖書に証言されたイエス・キリストを巡る論争

1. 史的イエスとケリュグマのキリスト

しかし、ケリュグマのキリスト理解が、はたして歴史のイエス自身の自己理解と神の国の使信（メッセージ）の内容と広がりをも正しく継承・発展させたものであるのか、という問いが、20世紀

初頭から神学者の間で持ちあがり、ドイツおよび英米のキリスト教界一般にまで広く物議をかもしだした。

2. 両者の関係を巡る論争的研究を一瞥

ヴレーデ (William Wrede, 1859-1906) という人は、キリスト教の創始者が「イエスカパウロか」という二者択一的な問いを立てながら、結局パウロを、「キリスト教を贖罪宗教化した、キリスト教の第二の創設者」とみなした (“Paulus”, 1904, 1907²)。これは当時、自由主義神学者の間で支配的であった見解、すなわち、神学者パウロがイエスの単純・素朴な宗教を腐敗させた、という基本的な見解と呼応するものとなった。

同様にヴェルハウゼン (Julius Wellhausen) という人は、「イエスは最後のユダヤ教徒であり、パウロは最初のキリスト教徒である」と主張したが、この考えはそのままブルトマン (R. Bultmann) のものとなった。ブルトマンは、イエスは後期ユダヤ教に属したが、キリストは原始キリスト教会によって初めて知られ、告白された、との結論に至る。すなわち、復活の出来事において、初めてイエスはケリユグマ (= 宣教) の中心部分へと引き上げられ、弟子たちによってメシアとして宣べ伝えられ、甦りの主を称える信仰者の輪が形成されていった、と言う。こうして、ガリラヤ一帯とエルサレムとの間で神の国運動を繰り広げたイエスという人物と、のちに救い主 (メシア) としてヘレニズム世界にまで宣教されたキリストとの間の連続・非連続の問題が、いわゆる「史的イエスとケリユグマのキリスト」という問題として論争され、研究された。そこで「パウロではなく、イエスに帰れ」という合言葉となり、また、パウロ批判によって、キリスト教信仰全体の合法性・非合法性の問題が絶えず新たに提起されてきた。

しかし他方では、こういった動向の中で、新たな探究によって、いま言及した両者間の亀裂は大幅に縮められてきた。つまり、教会のキリスト信仰がイースターの出来事に対する応答であるにとどまらず、実は (地上を生きた) イエスの説教に対する正しい応答でもある、とみなす傾向が認知されてきた。それは、イエスと原始キリスト教団およびパウロとの断絶ではなく、連続性の可能性を指し示すものである。ブルトマン学派の一人である G. ボルンカムは、次のように述べる。「イエスとパウロの使信は、内容と考え方と言語の点で相違があるにもかかわらず、両者とも、人間とその世界とを目標としている点で、すなわち、神の前における人間と世界、そして世界に対する神の態度 (救いの愛と自由) を目標としている点で、一致している (エフェソ書 2: 14~16 参照)」と (G. ボルンカム、『パウロ』、佐竹明訳、新教出版社、1986 年復刊、369~372 頁)。

3. イエスは実在したか—イエスの歴史性の問題

上の問題提起よりもはるかに過激な問い、すなわち「イエスは実在したか」という問いが以前から持ち上がっていた。ドイツの代表的な新約学者の一人で現在はハイデルベルク大学の名誉教授である G. タイセンという人が 2010 年 9 月に日本新約学会の招待で「イエスとパウロ」と題する講演を行ったが、その記念講演を基本とする日本語の書物『イエスとパウロ』(教文館、2012 年) が発行された。その第一章が「イエスは実在したか」という問題を扱っている。その中で興味深いエピソードを紹介している。権力の頂点にあったナポレオンが 1808 年、ワイマールでの宮

廷舞踏会においてドイツの詩人ヴィーラントに出会った時、イエスはもしかしたら全く存在しなかったかもしれない、という意見を披歴した。このテーゼは当時フランスの著述家たちが詳しい資料分析もないまま主張されたものであった。ヴィーラントは即座に答えた。「まあ、これから一千年もしたら、そんな風に、『ナポレオンは実在しなかったし、イエナの戦いも存在しなかった』と主張されるかもしれませんね」。すると皇帝は、「大変結構な答えだ！」と言って、微笑みながら話を続けました。しかしこの問題はヴィーラントのジョークによって見過ごすわけにはいかない議論を研究者間に引き起こし続けた（例：ヘーゲルの弟子の Bruno Bauer, 1809-1882, Albert Karthoff, 1850-1906、その他）。

しかしタイセンが確認しているように、イエスの生涯を描いた諸福音書（マタイ、マルコ、ルカ）やパウロ書簡をつぶさに検証すると、イエスの実在を疑う余地はない。

4. パウロにとってのイエスという視点

以上において、「イエスとパウロ」を巡る問題状況を大まかに描いてみたが、私がここで「史的イエスとケリュグマのキリスト」という一大テーマについて全面から論じることは今回の趣旨ではない。むしろ、パウロ書簡の中で、パウロは地上のイエスをどう把握していたのか、そしてそれはイエスの歴史的現実に対する適切な解釈なのか、という問題を扱ってみようと思う。

II パウロの伝記的記述から→ガラテヤの信徒への手紙 1章 13節～20節 (使徒言行録 9：1～9)

13) あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。14) また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの方よりもユダヤ教に徹しようとしていました。15) しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、16) 御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、17) また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。」

18) それから三年後、ケファと知り合いになろうとしてエルサレムに上り、十五日間彼のもとに滞在しましたが、19) ほかの使徒にはだれにも会わず、ただ主の兄弟ヤコブにだけ会いました。20) わたしがこのように書いていることは、神の御前で断言しますが、うそをついているものではありません。

1. キリスト教徒迫害とダマスコ途上における回心

ファリサイ派のユダヤ教徒であったサウロ（パウロ）のキリスト教徒迫害の理由は何であったのか。律法への熱心さによって、パウロがステファノを含むヘレニストたちに怒りを抱いた核心的な原因は、律法や神殿に対する彼らの自由な振る舞いそのものよりも、イエスという人物を巡る事柄にあった。

かなり小グループであったヘレニストたちは、ユダヤ教徒から種々の処罰を受け、打撃を被って、エルサレムから隣接する領地や町々に逃れた。しかし（ヘブライ語の）シャウル（パウロ）は、エルサレムのシナゴグからダマスコに派遣されて、そこに逃れた扇動者たちを縛り上げよう

とした。ところがその目標に達する直前に彼は、十字架に死んで復活した人のあの幻に遭遇し、それによって彼の古い生き方は打ち砕かれ、まったく新しい、予期しない将来が彼に開かれた（使徒9：1以下、他）。

実にパウロ神学は、この出会いに基づく従来の価値と目的の根本的転換に依拠している。すなわち、このユダヤ教の教師は諸民族伝道者となり、「律法のための熱心さ」に代わって律法から自由な福音の告知が場を占め、「トーラー（律法）の業」による正しい人の義人に代わってただ信仰による神なき者の義人が場を占め、業による自由意志に代わってただ恩寵により賜った信仰が場を占め、さらに十字架上で呪われた似非メシアへの憎悪から、「十字架の神学」（それは十字架におけるメシアの代理的な呪いの死によって、人類の救済を基礎づける）は生起する。

2. エルサレムのペトロ訪問の成果

- ・パウロはペトロから、地上を生きたイエスに関する豊富な情報とイエス理解を知った。
- ・ペトロはパウロから、彼のダマスコ回心の意味とイエス認識の転換について知った。

（補足説明）

パウロは回心の直後にダマスコで、次に一定期間アラビアで、そして再度ダマスコで、合わせて2、3年の伝道経験を積んだ後、聖都エルサレムに上京した（ガラ1・18-20）。それは、この一匹狼的な伝道者が、聖都にある若いイエス共同体の代表者との繋がりをもとと願ったからである。しかし彼は、それがケファ（ペトロ）と主の兄弟ヤコブへの限定的な訪問であった、と神に誓って弁明することにより、おそらくガラテヤのユダヤ主義的キリスト教徒らの言い広めたうわさ、すなわちパウロがその初訪問以来、多くの指導的な使徒たちへの従属的、依存的関係に入った、との見解を退ける。（使徒言行録の著者でもある）ルカはパウロの言葉数の少ないこの訪問を補うかのように、しかし明らかに使徒パウロの言表と矛盾する仕方で、詳細に物語る（使徒9・26-30）。だがこの不一致にもかかわらず、パウロの自伝的な言表におかまいなしに、つまりまったくそれとの関係なしに書くルカ記述は、パウロとの驚くべき次の一致点をも示している。1. パウロはダマスコからエルサレムに来る。2. ダマスコでの命の危険から逃れてである（2コリ11・32-33と使徒9・23-25。2コリ11に描かれる「逃亡」がガラ1・18の「上京[アネールソン]」に先立ったことを、ガラ1・18-19も前提）。つまり、訪問の直接的・外的な動機は、思いがけない逃亡に迫られたことにある（→最初からダマスコで、エルサレムのケファ訪問の旅を計画したのでない）。3. 従って、間接的に明らかかなように、使徒はエルサレム訪問をある目的のために（例・彼の職務の合法性に不可欠な十二使徒との繋がり求めて）急いでいたわけでない。4. ただし彼は、自ら進んでこの訪問を決めた（→ケファに招待されたとは、両者とも報じていない）。

ガラテヤ書1章22～23節に基づいて、かつての迫害者の生の転換のことがエルサレムですでに知られていたとするならば、パウロはそこで彼の当時の友人や共同迫害者から復讐を受けることを恐れたに違いない、と推測される。つまり充分あり得る憶測を述べるならば、彼は自分の命がエルサレムにおいても極めて危ぶまれたので、到着に際して、できるだけそこで知られないままでしようとした（使徒23・16-22によれば、パウロの甥が彼をかくまっていた）。そしておそらく彼は、何ら事を荒立てることなく、この密かな訪問を果たし終えたと思われる。それが、「ケファ（とヤコブ）にだけ会った」背景事情であろう。その事情のゆえに彼はまた、十二人以上いたにちがいない他のすべての使徒たち（ガラ1・17節。ロマ16・7その他も参照）に表だって会わなかったし、彼らもまたパウロを見なかった。あるいは彼らはまだ、当時の迫害者から福音の告知者に転換した彼を見たいと願わなかったのかもしれない。

パウロが面識を求めるケファと並んで、主の兄弟ヤコブ（イエスの弟。イエスの死後に信徒の群に加わった）がそこにやって来るとするのは、最高指導者のケファに加えて、もう一方の律法厳格派のこの指導的人物が求められたことと関係するかもしれない。

その関連で付言するならば、このヤコブはそのほぼ7年後の43年頃、アグリッパ一世（ヘロデ大王の孫としてユダヤ全土を遂に領有し、ゼベダイの子ヤコブを殺してユダヤ人の歓心を買うなどして、律法に忠実な彼らの意向を汲みながら平穏な政治を行った。使徒12・3）の迫害によるペトロの逃亡の後、エルサレムでの指導権を握り、それゆえに49年頃の「使徒会議」の時に、彼が柱となる人々の中で第一人者に立ち、ケファの方は第二の地位を割り当てられる（使徒12・17参照）。つまりこの時代は、律法重視の風潮に見合う慎重さがユダヤ人キリスト者に必要とされる厳しい状況にあり、それが律法に一層厳格なヤコブの指導的登場に現れている。

（原始キリスト教団の一員に加わったヘレニストの）ステファノの殉教に代表されるヘレニストらが追放された2、3年後に、エルサレム教会にはわずかの弟子（ムナソンの名を記す使徒21・16、その他を参照）を除いて、圧倒的にヘブライ人、つまりアラム語を話すユダヤ人キリスト者が集まったであろう。そんな中で、かつての律法熱心な迫害者が今やヘレニスト以上のトーラー批判者としてエルサレムに出現することは、パウロだけでなくユダヤ人キリスト者たちにとっても危険なことと感じ取られたにちがいない。この緊迫した問題は、そのほぼ20年後に彼が遂に神殿で捕らえられるまで残っていた（使徒21・27-36）。つまり、最初のエルサレムのケファ（ペトロ）訪問に関するパウロの報告は、「唯一ただ」ケファと面識になりたいとの決定的な願いから上京したとも、また「彼」がすべて他の接触を拒んだとも言っていない以上、明らかに第二次的なルカの説明と同様、上に述べた困難な諸問題を示唆している。

いずれにせよ、この二人の重鎮との語り合いは、大きな意味をもっていた。

パウロはケファ／ペトロのもとで15日間、客として滞在した（エピメネイン。1コリ16・7-8、使徒10・48、21・4、10、28・14参照）。食事の交わりも当然含む「客のもてなし」は、原始キリスト教の一つの大切な徳であり、また相異なるイエス共同体間の結束とその路傍伝道の実りある働きにとっても、基本的諸前提の一つを形作った。それはすでに、旅人の接待に関するパウロの勧告とパウロ伝承の中に（ローマ12・13[ガラ4・14、ローマ16・23も参照]、1テモ3・2、テト1・8、その他）、またイエス伝承とルカの「伝道物語」にも（マコ6・10-11、10・12-14、ルカ9・4-5、10・5-12、使徒9・43、その他）見られる（後の『ディダケー』11・12、13・3には、制度化する教会における旅人接待の規定がある）。

多様に証言されたこの客接待の事実、それだけでもすでに、互いにかみ合い分裂した諸集団という考えとは相いれない。初期の諸教会の「カリスマ的、創造的な多様性」は、まだ修復不能な諸対立を生み出さなかったにちがいない。だがそれにしても、ケファが面識のない、しかも種々の点で問題のあった客人を二週間も自分のもとに宿泊させたことは、決して自明なことではなかった。ケファのこの自発的なもてなしは、突如エルサレムに現れたこの特別な訪問客への個人的関心ともきっと結びついてきたにちがいない。パウロの方はもっと明白に、個人的関心を抱いていた。そうでなければ、エルサレムに来なかったであろう。

この引きこもった2週間は、双方の豊かな交換を提供した。確かに、パウロはエルサレムでの3年不在（アラビアとダマスコで活動）とわずか2週間滞在（ケファ訪問）という対照によって、彼の使徒職の完全な独立を強調するが、そのことは、この重要な15日間に両人がよく知り合い、相手から学び会ったことを排除するものではない。むしろ、双方互いに何らかの知識をもっていたに違いないが、この2週間という期間は、相手方への偏見を取り除いてかなりの信頼の素地を作るのに適していた。

この訪問で問題なのは、オリエントでは半日あれば足りる「表敬訪問」のみでなく、原始キリスト教の進展に本質的なものとなった実質的の出会いである。コンツェルマンによれば、彼の言うこの「短い訪問」は、「その対話の内容を抜かしている。なぜなら、この訪問がどうも彼自身の神学にとって実質的でなかったからである」

(『原始キリスト教史』)。しかしこの見解は、ガラテヤ書1章15～24節の報告の意味をまったく誤解している。というのも、使徒はどこにおいても伝記的詳細を究めるレポーターなどではないからである。またこの15日間の交わりがなければ、その13年後の「使徒会議」での出会いはそれほど積極的な経過をたどらなかったであろう。ことに「柱と目される人びと」の内でも重要なヤコブ（二回目の対面のガラ2・9で、ケファを凌いで筆頭に名が挙げられる）が律法厳格派を代表して、この風変わりな客に会い（判断を下し）たいと思ったことは、意味がある。その際におそらくヤコブは、原始キリスト教団でも大切に重んじられた「二人、三人の証言によって事は立証される」という原則（申命19・15）に従って、ケファを補充する「証人」の役割を果たしたであろう（2コリ13・1、マタ18・16、1テモ5・19、ヘブ10・28参照）。さらに、ケファが後にこの特有な訪問をエルサレム教会に報告したことは、ほぼ間違いない。

この「面識」の内容について、人は積義的「長編小説」のようにあれこれと考えあぐねるべきでないかもしれないが（K・ベルガー、『神学史』参照）、少なくともパウロにとってそれは、単に「ケファからの情報、およびイエスの教えと働きに関する情報（→伝承）を得ること」（G・D・キルパトリックのガラ1・18に関する小論や、J・D・ダンの小論「ガラ1、2章によるパウロとエルサレムとの関係」）に集中したのではなく、それ以上のものであった。もちろん情報と結びつかない「個人的面識」などはあり得ないが、パウロに気がかりなのは、ケファの個人的データと性格以上にむしろ彼の神学思考（つまりキリスト理解、救済理解）や宣教内容（確かにイエスの言動をも含む）であった、と推察され得る。

言い換えるならば、あの過越の（十字架の）死から約6年経ったこの時点で、対話の中心に立ったのは「イエス」、すなわち地上を生きて十字架につけられ、復活して高挙し、今や告知された来るべき主である。実に二人の生と思考の中心点にあったものは、イエスの人格と彼によってもたらされた救済である。そして、パウロを二週間も自分のもとに留まらせたペトロ側の強い関心は、復活者イエスによる自己の召命と伝道を語るパウロその人にあり、また以前のファリサイ的律法学者が語り出す預言的約束とトーラーへの新たな理解（ローマ1・1-2、3・21、他参照）および福音理解にあった。

先に述べた核心部分のすべてが話題に上らなかったとしたら、この二人はいち早くから互いに不一致・分離の道を歩んだに違いない。単に天気のことなど表面的な会話で二週間を過ごしたとすれば、終末時の緊迫した時（1コリ7・29、フィリ4・5、1テサ5・2など）は余りにも惜まれる。否、確かにこの客人接待の期間は、互いに取り憑かれるほどの集中的な相互交換というものを示唆している。

ところで、半ば告白的・信仰問答的、半ば歴史的に列挙された第一コリント書15章3～8節、すなわち復活に関する最古の信仰告白伝承は、それがエルサレムかダマスコかアンティオキアに起源をもつかどうかを巡って、ここ50年間疲れを見せず議論されている。その定式は後に形成されたであろう。しかしその「内容」は少なくとも部分的に、（代表的な個々の証人として列挙されたケファとヤコブとパウロが初めて出会った）この重要な訪問の時に、どうして取り扱われなかったなどと言えようか。そして、当該伝承を要約的に締めくくる11節、「とにかく、私にしても彼らにしても、このように宣べ伝えているのですし、あなたがたはこのように信じたのです」（→教会の一致を基礎づける共通のケリュグマ伝承）との所見は、この訪問時にまず基礎づけられたと考えられる。その所見は、「原始キリスト教初期に多くの相矛盾する『ケリュグマタ』があったであろう」との今日好まれている見解を、現代的な神話形成の領域のものとして退ける視点をもつ。

さらに、積義家は一般に、この2週間にパウロがどのような諸伝承を受けたのかをもっぱら問題にするが、その逆の問い、つまりエルサレムの律法学者として教養を積んだ彼が、同時に「ヘレニズム的」ユダヤ教をも知り、やがて最も成果を上げる伝道者・教会設立者となった者として、あのガリラヤの漁師ケファ（ペトロ）に影響を与えなかったかどうか、という問いはほとんど立てない。しかし、ガラテヤ書2章の15～16節でパウロは、血統からして異邦人でなく同じユダヤ人であっても、人は律法の実行によってではなく、キリストへの信仰によって義とされることを「知って」（エイドテス）、そのユダヤの基盤を破棄するゆえに、彼はアンティオキアでケ

ファを叱責する（ガラテヤ2：14）。ここでパウロは、キリストの救済行為に基づく知識へとケファを取り込み、従ってその知識を彼と共有することを明らかに前提とする。それに合致してケファは実際に、初めは無条件でアンティオキアの異邦人キリスト教徒と共に食卓の交わりを、つまり彼らと聖餐を祝ったのである。パウロはこれを非常にはっきりと、次のように言い表す。ケファがこれらすべてを正確に知っているので、彼は「異邦人のように生活している」と（11-16節、特に14節。コリント教会でのケファの役割も、律法問題上はパウロと論争的な関係にないことが前提となっている。1コリ1：12、3：22、9：5）。ケファの正確な知識は、エルサレムでの使徒会議の席でのみならず、それ以前に遡って得られたものと考えられる。

このように、ケファはパウロとの最初の対話を通して、これらすべてを知っているので、他の柱と目されるヤコブとヨハネと一緒に、先にもたれた「使徒会議」においてすでに、パウロの福音を承認することができたにちがいない。

当時、親戚同士でもかなり長期間と思われた2週間におよぶこの滞在（トビト8：20参照）は、初期原始キリスト教運動の進展にとって決して非本質的なものではない。パウロのみならず、ケファもまた今述べたように彼から学んだ。従ってこれらの考察とは逆の見解、つまり未決着の律法問題について、パウロは使徒会議までの13年間に自己の見解を本質的に変更した、との主張はありそうにない。その主張によれば、例えば初期のパウロにとって非ユダヤ人の割礼は善悪に触れない「どうでもよいこと」であった（G・シュトレッカー、「解放と弁明」とか、またトラーは本来彼にとって何かファリサイ的、初期キリスト教的な「神人協力説」の意味での部分的な救済意義を有した、といった不明瞭な立場から彼は離反していったが、実は彼のそのような立場の転向が論敵から激しく非難されたのだ、と考える。しかし、それらのことは何ら跡づけられない。

神学的な非首尾一貫性と妥協用意というものは、現代的であるかもしれないが、真理問題が提起されたところでは、竹を割ったように筋を通すパウロの思考と生き方に対してそれは妥当しない。また「福音の真理」の固守は彼にとって、後の発見などではない。むしろ彼は、自己の生の根底的変革を被ってから約3年後の最初のエルサレム訪問時にすでに、この決定的な点で譲れない態度によって、ペトロとヤコブに強い印象を与えたであろう。

いかに、なぜこの訪問が2週間で終えたのか、またその直後どう行動したのかについて、いくつか推察し得るが、ガラテヤ書1章は何も語っていない。

Ⅲ パウロにとってのイエス

1. パウロ書簡に見られる共観福音書（マタイ、マルコ、ルカの三福音書）のイエス語録への示唆および関連内容

パウロ書簡は、共観福音書伝承における生前のイエスの言葉に対する豊富な示唆、もしくは事柄の上での関連を含んでいる。下記に列挙する。

ロマ2：19→マタ15：14、ルカ6：39

ロマ8：15→マコ14：36（ガラ4：4～6も参照）

ロマ13：7→ルカ20：25、マタ22：21

ロマ14：10→マタ7：1（1コリ4：5も参照）

ロマ15：7→ルカ15：2

ロマ15：8→マタ5：24

1コリ5：4→マタ18：20

1コリ6：7→マタ5：39～40

1コリ6：13→マタ15：17

1 コリ 9 : 19 → マタ 20 : 26~27
1 コリ 10 : 16 → マコ 14 : 24
1 コリ 13 : 2 → マタ 17 : 20
1 コリ 15 : 52 → マタ 24 : 30~31
II コリ 1 : 17 → マタ 5 : 37
II コリ 5 : 14 → マコ 10 : 45
II コリ 6 : 2 → ルカ 4 : 19、21
II コリ 12 : 8 → マタ 26 : 44
II コリ 13 : 1 → マタ 18 : 16
ガラ 6 : 1 → マタ 18 : 15
フィリ 2 : 15 → 申 32 : 5、マタ 17 : 17
1 テサ 2 : 16 → マタ 23 : 13
1 テサ 4 : 15~16 → マタ 24 : 31 以下
1 テサ 5 : 2 → マタ 24 : 43、ルカ 12 : 39

2. パウロのイエス・キリスト認識とは何か

「肉に従ってキリストを知ることをしてしない」の解釈を巡って

ダマスコ途上での根本的な転換は、イエスとその十字架死に対する認識・判断の根本的変化でもあった。その転換を示唆する箇所が第2コリント書5章16節であると思われる。そこで、神学的に極めて含蓄に富んだ論争の16節を中心に考察したい。

「従って、私たちは今後だれをも、肉に従って知ることはしません。私たちが肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ることはしません」(コリントの信徒への手紙二5章16節の私訳)

文頭の「従って」という接続詞が示すように、その前の14~15節に表明された、キリストの愛と彼の贖いの十字架死に対する告白 | キリストがすべての人のために死んだゆえに、すべての人もまた彼と共に [罪と自己賞賛に対して] 死んだ。それゆえに、彼らはもはや自分自身に対して生きるのではなく、むしろ彼らのために死んで甦った方のために生きるべきである | は、16節を理解するために重要である。つまりこの告白の帰結として、16節が提示されている。キリストのために生きる人は、人間と世界を競争相手または搾取の対象と見なすのではなく、まったく別様に認知して、すべての人間の中に、キリストがそのために死んだ兄弟と姉妹を見ることができるようになる (1コリ8:11)。「従って」、このような見方、生き方のためには、キリストと人間に対する正しい認識 (16節) もまた不可欠とされる。

さて、問題は16節後半の「肉に従って」(カタ サルカ) が目的語の「キリスト」にかかるのか、動詞の「知る」にかかるのか、という釈義上の論争である。もしもキリストにかかるとすれば、肉的なキリスト、すなわち自然の身体的・地上的なキリストということになり、この節は、パウロが使徒として召命を受けて以来、もはや地上の(史的)イエスへの関心をもたず、彼の神学にあっては福音宣教の内容(ケリュグマ)である「イエスの十字架の死と復活」が根本的な意味を持つのだと言っている、というようにしばしば理解された。とりわけ、ブルトマンとその学

派はこの一節を、かつての宗教史学派の W・ブセットがしたように、ケリュグマに集中する釈義の正当性を提供する箇所と解した。それによれば、パウロはここで「肉に従ったキリスト」を、すなわち肉的、この世的に存在しているキリストなどというものを、信仰にとっては無意味なものとして拒否したのだ。それゆえに新約聖書の釈義家にとって、歴史的イエスの問題は文献的に解き得ない問題と見なされるばかりか、神学的な邪道としても回避されねばならない。正しい信仰は、それが十字架と復活のケリュグマという信仰の事柄に基礎づけられるゆえに、ナザレのイエスのどんな伝記をも必要としないのだ。さらに、16節のいわゆる「生活の座」(文脈)として、パウロの敵対者たちとの論争が視野に入れられる。パウロの使徒性の失墜を狙ってコリントの教会員たちを扇動した彼らは、(敵対者の出自と規定についてはケーゼマンやゲオルギなど、学者によって異なるが、)自分の使徒的な権威づけを直接・間接に地上のイエスに遡らせ、自分たちは地上のイエスのことを知らされていると言って、特定のイエス像を伝達し(2コリ11:4)、肉的(地上的)イエスについてまるで無知なパウロは使徒に値しないと非難し反目したが、まさにこれらの敵対者にパウロはここで反論しているのだ、と解釈する。

しかし、最近の釈義家たちが新たに見ているように、少なくともこのテキストの用法上、「肉に従って」の語が目的語の「キリスト」の前に置かれるのは、この言葉が副詞的に用いられて動詞にかかり、いわば「肉的に知る」という認識の仕方を特徴づけていることを指し示す(朴憲郁、『パウロの生涯と神学』(増補改訂版)、教文館、2021年、42~47頁)。しかも第二コリント書において、特定のイエス像、キリスト論はテーマ化されておらず、むしろ一貫してキリストを認識する側の使徒性がテーマ化され、注目され続けている。G.タイセンも筆者の見解と同一である(上掲書、18~19頁)。

そこで、「キリストを肉的に知った(エグノーカメン、完了時制)」とは、パウロが自分の生涯の中でまったく肉的に、従ってその結果、犯罪的な仕方でもキリストを認識・判断し活動した一時期、つまりあのスカンダロン(躓き)のゆえに、ヘレニズム・キリスト教徒への徹底的な迫害者として振舞った時期がある、という事実を指す。

だがこの「肉的」なキリスト判断(イエス=律法違反者)は、ダマスコにおける神の啓示による回心以来(2コリ4:6、ガラ1:16~17)克服され、キリストに対する急激な判断転換の「今は」(アポ トゥー ヌン)が起こった。つまり彼は、神に呪われ木に架けられたという聖句(申21:23)が、実は「私たちのために」神が呪いにかけて義人の死に関する言及であることを知った。このことはガラテヤ書3章13節で表明され、上で瞥見した16節に先立つ14~15節の内容とも一致する。イエスの教えと行動が、神との同等性を求める冒瀆的な権威主張(マコ2:5、14:62参照)に根ざすのではなく、神の意志に従う苦難の「神の僕」が担う課題遂行として生じたことを(21節の背後にあるイザ53:4~5、11~12参照)、パウロは悟った。ここにおいて、彼が出会い、認識する高挙のキリストは、十字架の死を遂げた地上のイエスと同一の方となる。

第2コリント書5章16節に戻るが、パウロが肉に従ったイエス認識のゆえにキリスト教徒迫害の一途を辿った末に、復活した高挙のキリストの顕現に遭遇したが、それは彼の人生を二分した。今や彼にとって、イエス・キリストこそ、人間によって蔑視されたが、神によって承認された神

の僕（イザ 53・3～4）である。この認識から出発する時、人間に対しても新たな認識と判断が生じる。すなわち、御子の十字架死を人間に対する神の最後の愛と救済行為として新しく評価するに至る（フィリ 3・10 参照）。その中心にあるキリスト認識（キリスト＝神の子）こそ人間に対する新たな態度の基礎を築くのだ、とパウロは論争的に強調している。

さて、16 節に関する以上の考察からすれば、パウロが史的イエスに無関心であると言う結論は決して出てこない。しかし同時に、パウロが地上のイエスを個人的に知っていたかどうかについては、この節は積極的にも消極的にも手がかりを与えない。ルカが報告するように、パウロがエルサレムの律法学者のガマリエル一世のもとで薫陶を受けたとすれば（使徒 22・3。7・58、26・4 以下も参照）、パウロがエルサレムで、受難の過程にあったイエスを目撃したかもしれないという興味深い可能性を、まったく拭い去ることはできない。従ってさらに、彼のキリスト教徒へのあの憎しみは、早くともこの時期に醸成され始めていたと推測する。だが、もしも個人的な接触によるイエスとの敵対関係がすでにあったとすれば、パウロはこれを後に表明することによって、突如彼を回心に至らせた神の一方的な恵みを、もっと鮮明かつ対照的に、有効に証言したはずである。ところが、パウロのどの書簡にも、それらしき言及は見当たらない。むしろ、彼はもっぱらキリスト教会に敵対し、迫害したことを、繰り返し指摘している。そういうわけで、右のような推測は、何ら根拠を持っていない。

しかし、上で述べたように、使徒の（肉的でない霊的な）キリスト認識は、彼固有の仕方で地上のイエスへの関心を深めている。O・ミッヒェルの次の見解は受容されてよい。「霊的認識とは、決して史的経験を止揚したり危険にさらしたりすることではなく、むしろ反対に、史的現象を新たな次元へと深化し、獲得する事である」（O. Michel, *Erkennen dem Fleisch nach* (2Kor 5,16), *Ev.Th.* 14. 1954, 23f., in: ders., *Dienst am Wort, Gesammelte Aufsätze*, hrsg. V. K. Haaker, Neukirchen-Vluzn 1986, 117f.）。使徒はいわば、イエスがその生涯の中で振る舞ったことの本質的意味を、その生涯の最後に起こった歴史的な出来事の中に決定的にみようとす。

〈むすび〉